

明治・大正期における 「江戸」の商品化

三越百貨店の「元禄模様」と「江戸趣味」創出をめぐる

Commercialization of the Edo Style in the Meiji and Taishō Periods: The Booms of Genroku Patterns and Edo Taste Created by Mitsukoshi Department Store

岩淵令治

IWABUCHI Reiji

はじめに

①三越の流行創出と「江戸」

②元禄会の軌跡

③江戸趣味と江戸趣味研究会

おわりに

【論文要旨】

国民国家としての「日本」成立以降、今日に到るまで、さまざまな立場で共有する物語を形成する際に「参照」され、「発見」される「伝統」の多くは、「基層文化」としての原始・古代と、都市江戸を主な舞台とした「江戸」である。明治20年代から関東大震災前までの時期は、「江戸」が「発見」された嚆矢であり、時間差を生じながら、政治的位相と商品化の位相で進行した。前者は、欧化政策への反撥、国粹保存主義として明治20年代に表出してくるもので、「日本」固有の伝統の創造という日本型国民国家論の中で、「江戸」の国民国家への接合として、注目されてきた。しかし後者の商品化の位相についてはまだ検討が不十分である。そこで本稿では、明治末より大正期において三越がすすめた「江戸」の商品化、具体的には、日露戦後の元禄模様、および大正期の生活・文化の位相での「江戸趣味」の流行をとりあげ、「江戸」の商品化のしくみと影響を検討した。明らかになったのは以下の点である。

①元禄模様、元禄ブームは三越が起こしたもので、これに関係したのが、茶話会と実物の展示という文人的世界を引き継いだ元禄会である。同会では対象を元禄期に限定して、さまざまな事象や、時代の評価をめぐる議論、そして模様の転用の是非が問われた。ただし、元禄会は旧幕臣戸川残花の私的なネットワークで成立したもので、三越が創出したわけではなかった。残花の白木屋顧問就任や、三越直営の流行会が機能したこともあって、残花との関係は疎遠になる。元禄会自体は、最後は文芸協会との聯合研究会で終焉する。また、元禄ブーム自体も凋落した。

②大正期の「江戸」の商品化に際しては、三越の諮問会である流行会からの発案で分科会たる江戸趣味研究会が誕生する。彼らは対象を天明期に絞り、資料編纂の上で研究をすすめ、「天明振」の提案を目指した。しかし、研究成果は生かされず、元禄を併存した形で時期・階層の無限定な江戸趣味の展覧会が行われる。そして、イメージとしての「江戸趣味」が江戸を生きたことの無い人々の中に定位することを助長した。「江戸」は商品化の中で、関東大震災を迎える前に、現実逃避の永井荷風の「江戸」ともまた異なった、漠然としたイメージになったのである。その後、「江戸趣味研究会」の研究の方向性は、国文学や、三田村鳶魚の江戸研究へと引き継がれていくことになった。

【キーワード】 江戸、表象、商品化、百貨店、江戸趣味、伝統の発見

はじめに

「伝統」の創出という問題は、歴史学ではエリック・ホブズボームらの議論⁽¹⁾に端を発する。

日本列島においては、国民国家成立以降、今日に到るまで、さまざまな立場で共有する物語を形成する際に「参照」され、「発見」される「伝統」の多くは、「基層文化」としての原始・古代と、都市江戸を主な舞台とした「江戸」ではなからうか。この点で、明治20年代から関東大震災前までの時期は、「江戸」が「発見」された嚆矢として重要である。

明治10(1877)年の明治天皇の京都・奈良行幸を境に、奈良・京都は皇室の「伝統」の源泉として浮上し、さまざまな形で文化的「伝統」が「発見」され、「国風文化」が發明される。これに遅れて明治20年代以降、東京でも「江戸」が「発見」され、表象されていく。おおまかに見通しを述べれば、それは時間差を生じながら、2つの位相で進行した。1つは、欧化政策への反撥、国粹保存主義として明治20年代に表出してくる「歴史回顧熱」の中での「敗者」たちの復権、佐幕派維新観の表明である⁽⁴⁾。明治22(1889)年8月の東京開市三百年祭を1つの象徴とするこの位相は、「日本」固有の文化、伝統の創造という日本型国民国家論の中で、「江戸」の国民国家への接合として、注目されてきた⁽⁵⁾。

しかし、このいわば政治の位相とともに、もう1つの「江戸」の「発見」として看過できないのが「商品化」の位相である。ホブズボームらの研究の中でも「スコットランドのキルト」の創出で指摘されるように、国民国家形成とともに「伝統」の発見の重要な契機となるのが、「商品化」の問題であった。国民国家論は、しくみとしては今日のナショナリズムにも適用が可能であり、重要であることは疑いも無い。しかし、社会へのイメージの浸透という点で、「商品化」も重要な契機であろう。この点で、民俗学のフォークロリズム、たとえば、年中行事における恵方巻の研究などが参考になる⁽⁶⁾。ただし、主に現代が対象であり、歴史学では展開が不十分といえよう。この点で注目したいのが、三越による「江戸」の商品化である。具体的には、日露戦後の元禄のモード、および永井荷風に代表される文学作品なども含めた、大正期の生活・文化の位相での「江戸趣味」の流行である。近代における三越(1904年に三越呉服店より三越百貨店に改称 以下ともに三越と略記)の流行創出のしくみについては、すでに神野由紀氏が「趣味」の誕生という視点からその全体像を検討している⁽⁷⁾。本稿では、とくにこの「元禄模様」と「江戸趣味」をとりあげ、諮問研究機関の活動と、「江戸」を利用した流行創出、すなわち「江戸」の商品化との関係をあらためて検討したい。

①……………三越の流行創出と「江戸」

明治末から大正期にかけて百貨店が実践したPR誌や諮問研究機関の活用による流行創出のしかけは、三越が嚆矢であった。三越においては『花ころも』が明治32(1899)年1月創刊、流行会が明治39年6月設立であるが、たとえば高島屋では『新衣裳』創刊が明治35年、研究者や与謝野晶子をはじめとする芸術家に運営の協力を得て染織品の一般公募・展示を行う「百選会」設立が大正2(1913)年、また白木屋では『家庭のしるべ』(のち『流行』)が明治39年1月創刊、流行会が大正10

年設立、松阪屋では『衣道楽』（のち『モーラ』と改題）が明治39年創刊、「台麓図案会」が大正9年設立、松屋では『今様』が明治39年創刊、流行を研究する「今様会」（明治45年発足 報道関係者中心）が研究者（塚本靖、笹川臨風、東京美術学校長正木直彦、東京美術学校教授岡田三郎助、久保田米僊）を招き入れた形で「顧問会」として拡充したのは銀座店開店後の大正14年のことであった⁽⁸⁾。三越の先駆性がうかがわれる。そして、その流行創出にあたっては、過去の事物の商品利用が最初に行われたのである。まず、この三越の流行創出のしかけについて、神野氏の研究をもとに概観しておこう⁽⁹⁾。

三越の経営の中核にあった高橋義雄は、日清、日露戦争直後に、「伊達模様」と「元禄模様」という、過去を利用した流行を創出した。

「伊達模様」は「黄地に柳桜と胡蝶を染め出した模様で、好景気で人の好みは派手になってきていたことを察知してつくった、派手模様の衣裳」で、明治29年に新橋の人気若手芸者5人に贈り、考案した「伊達模様踊」を花柳界で流行させたが、反響は一部にとどまった。

こうした経験をもとに、高橋が日露戦後の戦勝景気の中で派手な模様を流行らせようとしたものが「元禄模様」である。その図案は「意匠係で作った昔の模様を集めた「模様集帳」から「優れた元禄模様を選び出し」たもので、これをもとに「数十種の衣裳を作り」、前回と同様に「元禄花見踊」を考案して「新橋の人気芸者による舞踊団」で宣伝を企てた。さらに神野氏が注目したのは、新たな流行創出のしかけである。三越は、PR誌『時好』誌の4月号より元禄に関する記事を掲載し、5月号では懸賞図案を募集することで、「一般人をも巻き込んだ「大元禄ブーム」を全国展開させる契機」を作った。“元禄”を冠する多岐にわたる商品も成功をおさめ、元禄ブームの到来を実現した三越は、さらに「絶えず次の流行を作り出してくれる常設の機関」として、同年6月に「流行会」を結成したのである。流行会は、「古今東西の流行を研究し時代の嗜好の向上に図る」ことを目的とし、懸賞募集、課題を設けた研究、展覧会や講演会を開催した。三越は、流行会に研究者、ジャーナリスト、芸術家などさまざまな分野の知識人を網羅することをめざし、流行会の活動を「学俗協同」と呼んでいる。

こうした流行会に先行するのが、元禄ブームにあわせて同年7月に発会した元禄会であった。また、流行会の中でも、明治42年2月の塚原洪柿園と佐々醒雪の参加を契機に、江戸趣味研究の傾向が強くなり、大正2（1913）年12月にいわば分科会として江戸趣味研究会が設立されている。

両会の概要と意義については、すでに「流行」創出の中で神野氏がまとめられているが⁽¹⁰⁾、以下、本稿では、過去の商品利用と「伝統」の発見・創造という関心から、この元禄会と江戸趣味研究会の活動の詳細な検討と比較を行い、三越における「江戸」表象の変容を明らかにしたい。

②……………元禄会の軌跡

1. 第1回元禄会

第1回の元禄会が開催されたのは、明治38年7月23日のことであった。参加者は54名⁽¹¹⁾で（写真1・2）、判明する参加者は表1に示した（以下、各回の参加者については表1を参照されたい）。開催場所は神田柳原の元町奉行所与力原胤昭宅⁽¹²⁾であった。当日の次第は表2に示した通りである。会の

主催者は、旧幕臣の復権運動に力を注いだ旧幕臣戸川残花である⁽¹³⁾。残花は最初の発会の趣旨を「元禄に就き是を多方面より研究せば必ず多数は国家の為めともならん」と結んでいることから⁽¹⁴⁾、目的は研究であって、流行の創造にあったわけではない。新聞記事では「戸川残花氏の発起にて」⁽¹⁵⁾、「井上頼圀・小杉楯邨・足立荒人・島田三郎・岡野知十外数氏の賛助を得、戸川残花氏の手によりて今回発会されたる同会（*元禄会）」⁽¹⁶⁾（*以下は筆者註、以下同じ）とあり、「近來に無い高尚な趣味のある会合」として⁽¹⁷⁾。三越のPR誌でも「元禄模様一たび世に公にせられてより、天下靡然として元禄を偲ぶに至り、元禄研究会といふもの、先日二十五日を以て神田柳原原胤昭氏方に於て開会せられたり。」と三越の関与を示していない⁽¹⁸⁾。三越が産み出した元禄ブームが背景にあった可能性はあり、所蔵品を出品するなど三越は会と無縁ではないが、以上の記述から、発会は三越とは直接関係なく、戸川残花が、自身のネットワークによったものと考えられる。元禄期にかかわる資料を「参考品」として展示する、あるいは「今日ハ全く茶話会やうのものにしたいので、チト壓制だが自分が順々に指名するから其人に談話を請ふ」⁽¹⁹⁾といった「茶話会」形式の進行も、近世の文人の会の方式を踏襲するものといえよう。

展示された参考品については画像も全体の目録もないため、全貌は不明だが、出品者の勝海舟は戸川残花と縁戚関係にあるなど、借用にあたっては残花のネットワークが機能していたと考えられる。観客の反応も不詳だが、新聞記者の感想では、素人目にも興味をひいたこととして、桂昌院の産着と三越の女衣裳から当時の着物の袖丈の長さや、床置香台から「將軍家の大奥其他貴婦人社会の時候風俗を知る」、「正徳頃」と推測される風俗絵巻物が「当時の各種の行商から乞食まで幾百種の職業身分の者が網羅され、一寸得難い資料である」といった記述がみられる⁽²⁰⁾。

当日の話は、一部が新聞に掲載されていることから、概要を知ることができる。まず福地が日本の武士道が元禄期に墮落したと口火を切ったところ、鳥居が日本の文化が外国から影響を受けずに純粹に発達した時代で「民族心理学」の研究対象として興味深いと説き、これに対して岡部が人類学の方法で歴史学の領域に踏み込むことについて批判をし、話が元禄の文化論から外れて終わっている。この時の岡部の発言は、さっそく横山達三の雑誌論文での批判をよび、第2回研究会に話題が継続した。また、三越の意匠部主任の靱山衣州による流行創出の話については、残花と親交のあった旧幕臣で彰義隊隊長の本多が、戦後の行く末が不透明な時期に「余り国家の大事を他に見た遣り方だ、左様いふ事ハ日本臣民として少し考えて貰ひたい」と、批判している⁽²²⁾。こうした論調は、元禄会メンバーではないが三越への展示にたびたび出品していた旧館林藩主家の秋元興朝も、元禄時代を「単なる肉慾時代」ではないとした上で、他の文章で以下のように述べている。

（前略）時代も風俗も何も考へずに、二百年前の模様をその儘染め出して、二百年後の男女に似合ふようにといふのは、甚だしき没眼識ではあるまいか。元禄模様の精華のあるところを看取して、これによりて一機軸を放出して現代の社会に適應するようになるのが芸術者の力むべきところであろう（中略）美術ばかり出来ても、富国強兵で無くては不可⁽²³⁾ぬ

（中略）今日は奢侈を道徳的としては非ずして、経済的見解よりして排斥すべきものである（中略）それが欧米輸出品ともなりて、国利とも成ることであるならば、必ずしも一概に排斥す可らざる事情も存するのである。芸術の如きも奢侈の産物たるには相違無からんも、今日の芸術家たるもの巧に之を咀嚼して、之を今の工芸に應用して、欧米人の嗜好に投合することも有

らばそれは芸術家の手腕と言はるるであらう⁽²⁴⁾（後略）

このように秋元は、デザインのための取り上げ方や、奢侈品製造の批判におよび、富国強兵につながる輸出をすすめるべきだとしている。こうした視線も元禄会とその周辺には存在したのである。

こうした議論ののち、次回は暑い8月を避けて9月を計画する⁽²⁵⁾として、5時間におよぶ会は終了したが、第2回の開催は11月となった。

写真1 第1回元禄会集合写真(表) 個人蔵

写真2 第1回元禄会集合写真(裏) 個人蔵

表1 元禄会の参加者(聯合研究会のみの参加者は除く)

番号	人名	参加回	生年	没年	職業ほか	備考
1	戸川残花	1・2・3・ 聯	1855	1924	詩人・宣教師	戸川安宅・別号は百合園主人
2	森無黄	1・2・3・ 聯	1864	1942	実業家, 俳人	別号は六彩居・三溪
3	清水清風	1・2・3・ 聯	1851	1913	郷土玩具蒐集・研究の先駆者	
4	角田竹冷	1・2・3	1857	1919	俳人・政治家	俳諧結社秋風会を結成した俳人
5	初山東洲(邦季)	1・2・3・ 聯	1858		画家。三井呉服店意匠係長	向後恵里子「三井呉服店における高橋義雄と意匠係」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊』51, 2005年
6	荒木真弓	1・2・3			大日本漆工会	
7	本多晋	1・2, 聯			元彰義隊隊長	
8	富士川游 ※聯では「外壺名」	1・2, 聯	1865	1940	研究者(医学史)	
9	堀野文禄 ※聯では「外壺名」	1・2, 聯			滑稽文学者, 出版人 (文禄堂)	「文禄堂」(森銚三著『明治東京逸聞史』2, 「東洋文庫」, 142, 平凡社, 1969年)
10	岡部精一	1・2	1868	1920	歴史家	陸軍編修官→維新史料編纂官
11	内田魯庵	1・2	1868	1929	評論家・翻訳家・小説家	本名は貢。別号不知庵・三文字屋金平
12	伊藤松宇	1・2	1859	1943	俳人	父は伊藤洗耳 椎の友社結成
13	大嶋宝水(三蝶, 貞吉)	1・2	1880	1971	俳人	『現代都々逸集』(三芳屋1911年)ほか 永井荷風の親戚。
14	田能村梅士(秋臯)	1・2	1868	1915	新聞記者・狂歌作者	田能村竹田の曾孫。筆名朴念仁・朴山人。号は秋臯
15	関如来	1・2	1866	1938	新聞記者・美術評論家。本名は巖二郎	
16	松居松葉	1・2	1870	1933	劇作家	外遊後, 明治座革新興行を企てて失敗。以後文芸協会, 帝国劇場, 松竹で劇作・演出に携わり, 劇壇の重鎮『新版 歌舞伎事典』(平凡社, 2011年)。
17	戸田正秀(玉秀の誤りか)	1・2	1873	1933	画家・三越意匠部	
18	大隈伯	1, 聯	1838	1922	大隈重信	第2回は病欠
19	護国寺管長富田敦純	1, 聯	1875	1955	真言宗豊山派管長	
20	原胤昭	1, 聯	1853	1942	もと江戸南町奉行与力・十字屋書店・東京出獄人保護所	
21	原みき子	1			原胤昭夫人	
22	水口薇陽(鹿太郎)	1, 聯	1873	1940	俳優	1923年日本映画俳優学校設立, 早稲田出身
23	三上参次	1	1865	1939	東京帝国大学教授	のち貴族院議員
24	今泉雄作	1	1850	1931	美術史家	東京美術学校の創立にかかわる。のち京都市立美術工芸学校長, 帝室博物館美術部長, 大倉集古館長。吉田千鶴子「今泉雄作伝」(『五浦論叢』6, 1999年)。
25	福地源一郎	1	1841	1906	作家・劇作家	号は桜痴
26	棚橋あや子(絢子)	1	1839	1939	教育者	夫は俳人の棚橋大作。1903年より東京高等女学校初代校長。
27	正木直彦	1	1862	1940	美術行政官	東京美術学校長(第5代)
28	布川孫市	1	1870	1944	社会学者	

29	鳥居龍蔵	1	1870	1953	人類学者 東京帝国大学理科大学講師	
30	手塚新	1			宗教者か	明治20年代に日本基督安芸教会教師『絵入心の鏡』(十字屋書店, 1880年, 手塚新訳)
31	蜂須賀正昭	1			侯爵 旧徳島藩主家	
32	梶田半古	1	1870	1917	日本画家	日本青年絵画協会の設立, 日本美術院
33	小野田翠爾	1			速記記者	『現代名士の演説振』(博文館, 1908年)の著者
34	岩堀智道	1			元真言宗豊山派能化(管長)	
35	澤田秀元	1			護国寺貫主	
36	渡辺香涯	1	1874	1961	画家	
37	中山丙子	1	1876	1947	新聞記者, 民俗学者(中山太郎)	
38	佐々木伯(代理三好■堅)	1	1830	1910	元土佐藩士, 政治家, 皇典講究所所長	
39	邨松秀茂	1	1843	1923	狂歌師(文廻屋秀茂)	
40	宮城義海	1				
41	穂波快念	1				
42	南能衛	1	1881	1952	音楽教育家, 作曲家, 唱歌編纂掛編纂員	
43	丹生谷隆道	1				
44	赤塚自得	1	1871	1936	平左衛門 漆芸家	
45	都築成幸	1		1912	元八丁堀与力 香道	
46	吉田勝之	1				
47	湯澤龍岳	1			元真言宗豊山派管長	
48	★久保田米斎 ※聯では「同夫人」も	2・3, 聯	1874	1937	画家・舞台美術家, 米僊の長男	『時好』の編集責任者
49	亀谷馨(天尊)	2・3				『海舟遺稿』(鴻盟社, 1899年)の編者。
50	島崎柳塙	2・3	1865	1937	画家。三井呉服店意匠部	
51	福地復一	2・3	1862	1909	美術史家	日本東洋美術史研究者, 装飾図案の創作・研究者
52	神谷鶴伴	2, 聯	1874		小説家 徳太郎 幸田露伴の弟子 西鶴の収集家	
53	柳原伯爵	2, 聯				*聯では「同夫人」も
54	小笠原伯爵 *聯では「令嬢三名」	2, 聯	1885	1935	伯爵 旧小倉藩主家	
55	塚越芳太郎(停春)	2, 聯	1864	1947	評論家, 歴史家	『東京市史稿』編纂
56	井上頼因	2, 聯	1839	1914	国学者	
57	五十嵐力	2, 聯	1874	1947	国文学者	
58	笹川種郎(臨風)	2	1870	1949	文学士 歴史家, 評論家, 美術史家	春峯庵事件(1934年)で逮捕
59	★佐々政一(醒雪)	2	1872	1917	文学士 国文学者・俳人	筑波会設立メンバー のち東京高等師範学校教授
60	横山達三(健堂)	2	1871	1943	文学士 読売新聞記者	
61	野口米次郎	2	1875	1947	英詩人 慶応義塾大学	
62	久保田米仙(櫻)	2	1852	1906	画家	
63	島村抱月	2	1871	1918	文芸評論家, 演出家ほか。	
64	日比翁助	2	1861	1931	三越	
65	福田琴月	2	1875	1914	小説家, 児童文学作家	

66	赤川寅太郎	2			唱歌編纂掛編纂員
67	梅津和軒	2			
68	長谷川天溪	2	1876	1940	文芸評論家
69	★塚原蓼洲(洪柿園)	2	1848	1917	旧幕臣, 小説家
70	三輪田元道	2	1872	1965	教育家
71	水野年方	2	1866	1908	画家
72	鏑木清方	2	1887	1972	画家
73	湯本武比古	2	1858	1925	教育学者
74	幸堂得知	2	1843	1913	劇評家, 小説家
75	島田三郎	2	1852	1923	政治家, ジャーナリスト
76	三木竹二	2	1867	1908	劇評家, 医者 森鷗外の実弟
77	石橋思案	2	1867	1927	小説家, 硯友社の創設メンバー
78	久保田金仙	2	1875	1954	従軍記者 米僊の次男
79	島田蕃根	2	1827	1907	仏教学者
80	武田信賢	3, 聯			江戸会員・集古会員・掃苔会員
81	岡田三面子	3	1868	1936	古川柳研究者, 刑法学者
82	遅塚麗水	3	1867	1942	新聞記者, 小説家

註) 数字は元禄会の回を, 聯は聯合研究会を示す。

★は江戸趣味研究会の委員を示す

各回の参加者の全貌は不明であり, 判明する者のみを示した。第1回は『読売新聞』明治38年7月24日, 第2回は『読売新聞』明治38年11月6日, 第3回は『読売新聞』明治39年2月5日, 聯合研究会は「文藝協會記事」(『早稲田文学』(第二期 明治三十九年七月之卷)による。

表2 第1回元禄会(明治38<1905>年7月28日14時～ 於原胤昭宅)

報告者	内容	備考
資料展示	「山鹿素行筆武田信玄の像」(勝海舟蔵), 「元禄人形」及び「元禄時代の風俗絵巻物」(清水晴風氏蔵), 「大高子の木刀」(関如来氏蔵), 「元禄衣服」(三越呉服店), 「元禄桂昌院用御産衣」・「吉綱, 綱吉両公用の床置香台」・「近江八景画帳」・「將軍家より隆光僧正に寄付になりたる袈裟」・「元禄日記」(護国寺蔵)等を「陳列せり」	
(日本) 女子大学 戸川残花	「思想」「開会せらるゝ迄の順序及び其趣意を述べ」[[「発会の主旨を述べ」]]	
福地桜痴	「元禄の武士道」[[「元禄時代の武士道を罵り」]]	
角田竹冷	「談話」[[「研究の方法に就いて演説し」]]	
護国寺 僧富田氏	「遺物に就ての説明」[[「談話」<出品資料より隆光についての説明>]]	
	写真撮影 ※写真1か	『読売新聞』明治38年7月25日に掲載
清水清風	「元禄時代の人形談」[[「談話」]]	
美術学校長 正木直彦	「元禄美術に関する談話」<桂昌院の美術保護, 法隆寺改築問題, 柳沢吉保非邪伝説>[[「美術保護問題に関して演説」]]	
<帝国理科大学> 鳥居龍蔵	「民俗心理学上より観たる元禄」[[「桜痴居士の説を反駁せり」]]	「民族心理学上より観る元禄」『読売新聞』8月6日
(日本) 女子大学 岡部文学士	「反対論」[[「鳥居氏に一矢を酬い」]]	
[[「当店の意匠部主任」]] 粉山衣州	「元禄風俗の流行の起源」[[「元禄衣裳の流行せし原因を説明し」]]<御自慢>, <「藝者を流行の源とした理由と警視庁の取締への批判」>	
元彰義隊隊長・林学博士 本多晋	演説<戦後の行く末が不透明な時期に「余り国家の大事を他に見た遣り方だ, 左様ふ事ハ日本臣民として少し考えて貰ひたい」>	

[[は「時好」明治38年第3巻8号, <>は「万朝報」明治38年7月25日, これ以外は『読売新聞』明治38年7月24日による。

2, 第2回元禄会

第2回は、同年11月5日に開催された。会場は日本橋倶楽部で(写真4上)、参加人数は約140人にも及んだ(写真3)。この時の様子は三越のPR誌に詳細に記されており、参加した新聞記者が、「今度ハ大分規模が大きくなり日本橋倶楽部にて開会され、三越呉服店の人々赤い弁慶のリボンを胸に差して奔走しておりたり⁽²⁶⁾」としているように、三越が深くかかわったことがうかがわれる。ただし、新聞記者は、大隈の欠席の説明で「其断りが伯爵閣下⁽²⁷⁾にのみ『御』の字が沢山ついて此日招待を受けて出かけたものも何も皆下目にされて」という点から、「如斯いふ趣味ある会ハ—貴族崇拜の黴臭ささへ抜けバ—發起人戸川残花翁の述べられし如く何処までも永続させたきもの也」としているように、「貴族崇拜」の残る「趣味ある会」といった文人の会のような印象が継続していたと思われる。

第1回と同様に、「元禄時代の参考品を楼上に陳列して来会者の参考に供したれば、会場は階下の大広間に於てせられたり」と展示も同時開催された(写真4下)。展示品については、PR誌に19点の写真が掲載されており(表3)、写真5～7にその一部を掲載した。初期浮世絵のうち8点は現在東京国立博物館の所蔵品で、高嶺俊夫から購入したものである。いずれも俊夫の父で開発教育の導入と師範教育の近代化を推進した教育家高嶺秀夫(1854～1910年)が収集したもので、この研究会の際には高嶺より借用した可能性が高い。また、写真5の小袖は今日も護国寺に伝存している伝桂昌院所用の「黒綸子地梅樹模様染縫小袖⁽²⁸⁾」である。このほか、同誌本文の方には、「大きな光琳の金屏風がございます、菊の絵を書きましたものでございます」「鶴の嘴と云ふ絵本」「大きな煙管」という記述が、新聞『日本』には「紀伊國屋文左衛門の俳句、市川柏蔭の袖香炉、桂昌院の御衣裳、常憲院殿の刀掛孰も珍しい思つたが市川海老蔵が石川五右衛門を扮した用ゐた煙管、生月太郎左衛門の煙管は中でも珍らしいと見た」とした上で「慾を云へば元禄の展覧品としてはもう少し好い豊富な材料があり相なものだと思つた⁽³⁰⁾」とある。

写真4 第2回元禄会の会場
(『時好』第3巻第12号, 1905年)

写真5 第2回元禄会の展示物(3)
小袖(『時好』第3巻第12号, 1905年)

写真6 第2回元禄会の展示物(1)
肉筆浮世絵その1(『時好』第3巻第12号, 1905年)

写真7 第2回元禄会の展示物(2)
肉筆浮世絵その2(『時好』第3巻第12号, 1905年)

表3 第2回研究会の展示品

図版番号	PR紙上のタイトル	現在の題名・所蔵	原蔵者
1	菱川師宣		
2	宮川長春		
3	宮川長春	「三人人物図」 元禄年間 無款(伝 古山師重) 東京国立博物館(★16)	高嶺俊夫
4	英一蝶		
5	元禄時代宮参りの図(無落款)	「宮詣で図」 寛文年間 無款 東京国立博物館(★参考4)	高嶺俊夫
6	宮川長春(美人画 軸)		
7	無名氏筆(美人画 軸)	「鎗踊図」 無款 享保年間 東京国立博物館(★参考28)	高嶺俊夫
8	宮川長春(美人画 軸)		
9	無名氏筆(美人画 軸)		
10	腔日堂(美人画 軸)	「髪梳き立美人図」 空明堂 正徳～享保 東京国立博物館(★白黒22)	高嶺俊夫
11	懐月堂度秀(美人画 軸)	「遊女立姿図」 宝永～正徳期 懐月堂度秀 東京国立博物館(★31)	高嶺俊夫
12	懐月堂度辰(美人画 軸)	「遊女立姿図」 宝永～正徳期 懐月堂安度 東京国立博物館(★29)	高嶺俊夫
13	長陽堂安知(美人画 軸)	「遊女立姿図」 宝永～正徳期 長陽堂安知 東京国立博物館(★26)	高嶺俊夫
14	懐月堂安度(美人画 軸)		
15	懐月堂安度(美人画 軸)	「風前美人図」 宝永～正徳期 懐月堂安度 東京国立博物館(★24)	高嶺俊夫
16	桂昌院着用の衣裳		
17	桂昌院着用の衣裳	護国寺蔵	
18	友禅(鶴 軸)		
19	英一蝶「耳の垢取り図」		

『時好』明治38年第3巻12号, および『肉筆浮世絵大観一 東京国立博物館 I』(講談社, 1994年 ★)による。

当日の次第は表4に示した通りで、さまざまな角度から元禄期の紹介がなされた。たびたび争点となるのは元禄文化の奢侈・退廃の如何であったが、まず注目したいのは、笹川臨風の模様の応用に対する意見である。笹川は、元禄奢侈論については批判し、「平民の勢力が出来たのは元禄時代」とした上で、模様の応用について、以下のように述べている。

(前略) 元禄の模様が、今日の時世に、其俣で応用が出来ないと思ひます、模様を御研究なさる方が元禄を研究してさうして元禄時代から新しい時代を考へ出して、明治の新しい時代を拵へなければならぬ、最早明治も四十年近くであるが、是れと云ふ新しい風俗がない、そこで新しい明治の風俗を拵へて往くには、古い元禄の風俗を研究して往かなければ、新しい明治の風俗が出来まいと思ひます、元禄時代の研究は、新しい風俗を研究する基であろうと

表4 第2回元禄会 (明治38<1905>年11月5日 於日本橋倶楽部)

報告者ほか	内容	備考
	「元禄時代の参考品を楼上に陳列して来会者の参考に供し」 <「桂昌院衣裳(足利銭阿寺出品)、元禄時代の衣裳(同)、神崎与五郎の店受証文(井上頼国氏出品)、徳川家康公母君傳通院殿肖像(戸川残花出品)、其角・嵐雪の軸(角田竹冷氏出品)、元禄時代の紙織並西鶴筆其他の屏風及び元禄時代の人形(清水晴風氏出品)、笠翁・一品・越人・園女等の幅(伊藤松宇氏出品)、一蝶筆幅外数品(松浦伯爵出品)、妙法院宮所持春雨琵琶(發前春雨女史出品)、紀伊国屋文左衛門筆(岡本猶吉氏出品)、五代將軍常憲院殿所持の刀掛(護国寺出品)、友禪の幅(広岡伊兵衛氏出品)、友禪の幅(山浦橋馬氏出品)、古画うわなり(福岡子爵出品)、元禄時代の櫛笄(粉山東洲氏出品)、元禄時代の枕・箱(関根正直氏出品)、同時代の饅飽箱蓋(同)、宗民<珉>二王目貫(徳川伯爵出品)、古鏡(西川春洞氏出品)、各時代各国の煙管(野口米次郎氏出品)、市川柏筵所持の袖香炉(久保田米斎氏出品) 其他	
(「大隈伯」)	(「戦後の美術工芸に就て演説ある筈なりしが、折悪く伯に病ありて果さず」)	
森三溪	「町奴」	読売新聞に掲載予定(未掲載)
久保田米仙(僊)	「元禄時代の絵画」	読売新聞に掲載予定(未掲載)
(以下突然の指名) 角田竹冷	「元禄時代の俳句」	読売新聞に掲載予定(未掲載)
亀谷聖馨	「元禄の華嚴宗に就き」	
野口米次郎	五分間演説→<「俳諧と西洋史」>(英詩からみた俳諧の評価)	『時好』明治38年_第3巻12号に掲載
文学士笹部(笹川の誤り)種郎(臨風)	五分間演説(元禄奢侈論の批判、「平民の勢力が出来たのは元禄時代」→文様の応用の検討)	同上
文学士佐々政一(醒雪)	五分間演説(改鑄、悪貨による成長、奢侈)	同上
文学士岡部精二(精一)	五分間演説 <「元禄時代と宗教」> 第一回の演説への『史学界』誌上での批判(横山達三)に対し、「日本の文学は元禄時代に矢張り思ふ存分に発達したと云へば、如何であらうかと思ひます、どうも首肯の出来ないことと思ひます」。ほか、桂昌院の護国寺建立を、光明皇后になぞらえながら、宗教と政治の関係を元禄期の興味ある課題として紹介。	同上
文学士横山達三	五分間演説 <「元禄と煙草及び酒」> 菊の愛好。煙草と三味線に象徴、「贅沢で社会の或生活の方から言ひますれば衰亡の兆を現はして居る」	同上
	記念撮影	
	茶菓の饗応	

出典 『時好』明治38年第3巻12号。ほか、<>は『読売新聞』明治38年11月6日による。

思ひます、元禄の趣味の在る所を、今日の趣味によつて研究したらよからうと思ひます、元禄の趣味を以て、其俣再興させると云ふことは宜しくあるまいと思ふ。(後略)

次に、佐々醒雪は、改鑄後の悪貨による成長と奢侈を話したのち、模様の応用については「今日其通りの真似が出来やうかどうかと云うことは問題であらうと思ひます」と述べている。⁽³¹⁾参加した新聞記者は、佐々の話を「考証明確にして興味津津、五分だけでおしまひにしたるハ惜みても余りある事なりし」と称賛している。⁽³²⁾これらの意見は、第1回の三越に対する批判とは異なり、江戸を利用して新たな流行を創り出そうとしている三越が望むものだったといえよう。佐々は、次章でとりあげる江戸趣味研究会の中心人物となる。ただし、研究会の進め方には次のような批判もあつた。⁽³³⁾

(前略) さあどうも僕に分らぬのが此会の趣旨である、夫れに此回の所謂研究の正体なのである、見渡せば来賓百余氏の其半ばは当代に名のある史学家文学家画家などである、元禄に関しては深遠の智識意見を懐いて居る人もあるであらう、然るに研究範囲の極めて多方面に渡る可き筈の元禄世相をタツタ五分間宛の議論に縮めさせやうとした處が夫れは無理なので土台夫れ許りの時間の講演に何を今更事々しく元禄の真相研究でもあるまいぢやないか、夫れで此の處は会主の戸川氏の云つた様に同好者のみが相会し御互の意見を交換もし討論もする、そしてその結果を世間に発表する、又た一方には一般の識者に意見を尋ねてジミに研究し合つた方が遙かに好い結果を収めるではあるまいかと余計な心配も之も研究の一案かも知ぬ

第2回研究会は、三越の主導で規模も大きくなり、茶話会のようなじっくりと議論を交わす雰囲気は失われてしまった。右の批判から、残花自身もこうした進め方をよしとはしなかったように思われる。

3、第3回研究会および文芸協会との聯合研究会

第3回研究会は、翌明治39年2月4日に、三囲神社において開催された⁽³⁴⁾(表5)。参加者は30人ほどである。三囲神社は三井家の守護社であったが、三越のPR誌には、この研究会についての紹介がない。この時には、「赤垣にちなみ貧乏徳利に政宗を入れてもてなす」とあり、講談になったいわゆる忠臣蔵の外伝「義士銘々伝」の1つ「赤垣源蔵 徳利の別れ」にちなんだ文人的な嗜好をみることができる。いわば元の運営の方法に戻ったといえるだろう。ちなみに、三囲神社の神主永峯光寿は考証家島田筑波のサークルのメンバーであり、⁽³⁵⁾1週間後には三囲神社で残花らの発起による「五百句吟会」が開催されるなど、残花と交流があつた。残花の記録では、30人余りのうち「岡田三

表5 第3回元禄会(明治39年2月4日 於三囲神社)

報告者	内容	備考
	、松平不昧公藏の光琳の淀屋小袖(三越出品)、豊臣時代の三■織小袖(同)[三越出品の古代小袖(三■おり)、淀屋小袖(光琳の梅松竹)]、寛永・元禄より天保に至るまでの羽子板(清水晴風氏出品)、普其角の軸、及び抱一上人筆の小短冊(三囲神社出品)	
亀谷馨	「元禄の華嚴宗に就いて」	
清水晴風	「元禄時代の羽子板」	
武田信賢	「元禄時代の墓」	
福地復一	「元禄以前の美術」	
	饗応、「会の組織に就いての座談」	

註)『読売新聞』明治39年2月5日、ほか[]は「わが徒然草袖の巻」(戸川家文書)による。

表6 聯合研究会(明治39(1906)年6月17日 於大隈伯爵邸)

報告者・演奏者	内容
展示	「元禄研究の参考資料として陳列品の設あり」大隈伯所蔵の緒(*原文ママ)形光琳筆屏風一隻[草花の屏風], 聖母マリアの木彫, 松浦伯所蔵の鎮信公所用の小刀(関孫六作), 菱川師宣, 同師重, 宮川長春の筆になれる書画[浮世美人画], 前田侯所蔵の蒔絵真鳥羽箱, 右小紋繻(襦)絆, 女房之翰六卷, 秋元子爵の所蔵徳川綱吉公及び喬朝公の墨蹟各一幅, 喬朝公着用鏡, 清水晴風氏所蔵の小野お通画讃, 英一蝶筆朝妻船, 磯前鈴子氏所蔵の後水尾帝御製の扇, 都一中氏所蔵都鳥の三味線及見毫等の陳列あり, また久保田米齋氏の筆になれる繪葉書を発行
幹事東儀季治	開會の辞 午後一時より
戸川安宅	挨拶
主任水口鹿太郎	曲目説明
山彦秀翁連中 <山彦秀翁, 秀子, 三子, やま子, つね子, 八重子>	河東節『乱髪夜の編笠』
福島とく子, 宮蘭千三子 <福島とく, 千休>	宮蘭節『夕霧』
<河東一中掛合 安井可抱, 吉本二長, 天沼蘭洲, 都太夫一中, 菅野吟平等> →都一はな子連中	<『源氏十二段』>→一中節『さつきの前道行』
山彦秀翁連中 <やま子, 稲子等9名>	<河東節『ゆかりの江戸桜』>

註)『早稲田文学』(第二期)の「文藝協會記事」, 『読売新聞』明治39(1906)年6月13・18日, 『趣味』第1号第3巻の「早稲田の俗曲会」(同年)による。読売新聞の記事は<>で, 『趣味』は[]で示した。読売新聞によれば, 河東節と一中節の掛合による『源氏十二段』が上演される予定であったが, 文芸協會の報告には記載がなく, 一中節単独の『さつきの前道行』に変更となった。この事情は不明である。

写真8 聯合研究会(1)(『趣味』第1巻第2号, 明治39年) 写真9 聯合研究会(2)(『趣味』第1巻第2号, 明治39年)

面子, 竹冷, 米齋, 東洲, 晴風, 宝水, 福地復一, 天尊, 信賢, 柳塢」が特記されている。⁽³⁶⁾この岡田三面子(古川柳研究者), 角田竹冷(俳諧仲間), 久保田米齋・島崎柳塢・初山東洲(画家 三越の意匠部), 清水晴風(集古会員, 郷土玩具蒐集・研究者), 福地復一(日本東洋美術史研究者, 装飾図案の創作・研究者), 亀谷馨(天尊)(『海舟遺稿』<鴻盟社, 1899年>の編者), 武田信賢(江戸会員・集古会員・掃苔会員)らは残花の元禄会の主力メンバーだったと思われる。また, 饗応の間, 「会の組織に就いての座談」がなされている。今後の方向性に関する重要な話し合いだったと思われるが, 残念ながら内容は不詳である。

約4ヶ月後の6月17日には、第3回の新聞記事ですでに予告されていたように⁽³⁷⁾、元禄会は大隈重信邸で文芸協会と聯合研究会を開催した。⁽³⁸⁾庭園や温室見物という嗜好もあいまって、多くの参加者を得ている。文芸協会の中でとくに中心となったのは、江戸の音曲の研究とこれをもととした新日本音楽の樹立を模索していた俗曲研究会で、この聯合研究会は「俗曲の研究として演奏されし歌謡」を聴く会であった(表6 写真8・9)。いわば復元された音曲だったとみえ、実際に新聞記者が興味深く聴いている様子がうかがえる。「河東節の演奏者は当時歌舞伎出演の河東節芸妓の粋を撰りたるとなれば、演奏頗る巧妙で、俗曲会としては近頃珍しい会」とされ、文芸協会側が力を入れていたことが推測される。⁽³⁹⁾この時も「受付より会場に至る廊下には、三越呉服店の元禄模様の中形と単帯が陳列せられ、突当りより会場入口へ掛け、花見小袖の幕が張廻され」と、やはり展示が行われたことがわかる。このうち、演奏で使用された緞子の引幕は「今回三越呉服店より文芸協会に寄贈した」もので、⁽⁴⁰⁾展示と合わせて三越の協力はあったことがうかがえる。ただし、第3回と同様、研究会は三越のPR紙では紹介されなかった。

4. 元禄会と三越

元禄会主宰の残花本人の自伝では、「明治三八、三九年」に「三越、白木屋、大丸 顧問」となっているが、白木屋呉服店の「意匠顧問」となったのは明治41(1908)年5月のことである。⁽⁴¹⁾1人の人物が複数の店と関わることは一般的であるが、⁽⁴²⁾残花はライバル店の顧問となったのである。このことが三越との関係に変化をもたらしたかは不明だが、先述したように元禄会の活動が三越のPR誌で紹介されるのは第2回までで、聯合研究会における三越の商品の展示以降は、三越と元禄会の関係、さらに元禄会の活動自体も不詳である。

その後、大正5年3月13日『読売新聞』で、「神田末広町の凝り屋の称ある美術指物商可奈免家主栗原金蔵氏」が「曾て故人清水晴風等が盛んに鼓吹し居たる元禄時代の有名なる文人墨客の遺愛品を模造して昔を偲ぶ風流なる企」を再開し、「元禄会」を組織したとし、「好事家の喜びやうな事なり」と結んでいる。清水晴風の没後一時停止していた元禄会を再び組織化したということであるが、この美術指物商のかなめ家は神田末広町に店舗を構え、大正3(1914)年10月に「おつな会」という会を作り、「江戸趣味の玩具又は書画小座敷用の道具類を小形に作」って会員に頒布している。⁽⁴³⁾おそらくこの元禄会も同様の会で、残花の元禄会とは直接関係はないと思われる。残花が継続して元禄会を開催したかは不明であるが、少なくとも三越の商品開発という場からは姿を消していったといえるだろう。

神野氏は、「単なる呉服の模様の流行があらゆる社会の方面へと瞬く間に波及していくのを目のあたりにし、三越では明治三十八年七月、学者、有識者を集めて急遽「元禄研究会」を組織した」と三越が元禄会を組織したと評価し、元禄ブームの沈静化にともなって「流行会へと自然吸収されて自然消滅したのではないか」としている。⁽⁴⁴⁾しかし、三越が元禄会に積極的にかかわったのは第2回研究会のみで、第3回以降、三越百貨店の直接の関与は見られず、PR誌でも活動は報告されていない。その後も元禄会が文芸協会と聯合研究会を開催していることから考えて、とくに第2回研究会について一時は三越と密接な関係にあったものの、その中核は主宰である戸川残花と関係する人々の私的なサークルだったのではなかろうか。残花の経歴の記述で、「例の元禄会も、氏の発起され

⁽⁴⁵⁾た]、「元禄時代の服飾が一時都鄙を風靡して流行するに至りしには、翁の之れが顕揚に力められしは人の能く知る所」⁽⁴⁶⁾とあるように、残花が積極的にかかわったことがうかがえる。また、最初の会場を提供した原胤昭は、残花の親友であった。元禄会は、むしろ残花の日常的な文人の会合を公開する形で成立し、三越は一時関係を深めるものの、ほぼ同時に自前の「流行研究会」を組織し、のちには内部に江戸趣味研究会を発足させたこと、また残花が明治41(1908)年5月にライバルである白木屋呉服店の「意匠部顧問」となったことなども作用して、元禄ブームの衰退とともに三越との関係が切れていったとみてよいだろう。

また、実際に三越が売り出して行った元禄模様も、厳密なものではなかった。白木屋のPR紙『流行』⁽⁴⁷⁾の掲載文では、「世の誤りを正して置きたい」として、「流行中に係る元禄文様」で「最も大立物として数へられる」「市松形」は寛延頃からの流行、「匹田鹿の子」は出典が不明で、「元禄以後宝暦明和に至るまでの流行風流を、団じて元禄風と世に唱はれるものは、(中略)元禄といふ年号が人の記憶する広告材料が多かつた、これが原因となつて居るで有らうと言ふことに躊躇せぬ」と述べ、また「所謂伊達風俗なるものについて、独り元禄と喋々するは最も誤りの甚しきものにて、其の根源は足利時代から延いて桃山時代に盛んであつた」としている。新たな模様の考案も含め、商品化には厳密な考証は無用であり、ブームさえ出来てしまえば、元禄に対象が限定される元禄会との関係は必要ではなくなっていくと考えられよう。

③……………江戸趣味と江戸趣味研究会 — 「江戸」の行方

1、江戸趣味研究会の成立と活動

大ブームとなった「元禄風」の流行にも陰りがみえはじめ、文様への「伝統」の利用は他に題材を求めることとなる。三越とともに流行の大半を創り出すと称される最大のライバル店白木屋の図案懸賞の課題などの場合、仮名文字を蘆手書きにしてちらした蘆手模様(明治41年)、歌舞伎模様・扶桑名勝模様(裾模様)(明治42年)、八犬伝模様(明治43年)と安定しなかったが、明治44年と大正元年の2年にわたって、「唐の趣味も加はらない、禅の趣味も入らない、全くの、純日本趣味の、品の好い、落ち着いた模様」で「人をして恍として婉麗なる王朝趣味に酔はしめむとす」「実に純日本式の精華」として藤原式模様を提案している。『読売新聞』は、江戸趣味の模様が「室町時代とか藤原式とか云ふ、華美なものゝ爲に圧倒されて終息して了つた」と評価している⁽⁵⁰⁾。

一方、三越では、流行会の活動の中心がしばらくは児童研究会や西洋調度に移ったが、大正元(1912)年の暮に、ふたたび「江戸」に関心が向けられた。同年12月8日の流行会で、翌年1月の帝劇興業の意匠選定のため特別委員を指名したところ、「近時世上に唱導さるゝ江戸趣味なるものゝ、真髓を本会に於て研究し且つこれを現代に通用せんと希望もあればこれ亦特別委員附託としたし」として、8名の特別委員が選ばれた⁽⁵¹⁾。8名とは、幸田露伴、佐々醒雪、邨田丹陵、塚原洪柿園、中内蝶二、井上剣花坊、斎藤隆三、久保田米斎である。三越側は「江戸趣味の勃興」として、「今日の社会に於て、多くを見るを得ざる江戸時代の研究者にして、其研究も各自立脚地を異になしつゝ、あれば、此研究の結果一たび世に発表さるゝ時んば、世人は非常の益を受る事となるべく、流行社会も亦其影響を受け、意外の変化を来さんも測りがたし。聞かまほしきは其研究の結果なるかな」

と期待を持った紹介をしている。⁽⁵²⁾注目したいのは、この「江戸趣味」の精緻な研究が、流行会の会員から提案された点である。「江戸趣味」の追求は、三越側ではなく、流行会の内部からおこったのである。さらに第1回江戸趣味研究会に流行会新規加入の饗庭篁村が、第2回からは特別委員らの推薦で「日本演劇史の著者」である伊原青々園が加わった。この10名の特別委員のうち、元禄会の参加経験者は6名であるが、このうち佐々醒雪・塚原洪柿園・久保田米斎以外の3名は聯合研究会からの参加である(表7)。神野氏は、「ここ(*元禄会)での江戸元禄研究が後述する流行会の江戸趣味研究の基盤となっていたことは、疑いないであろう」としているが、むしろ残花の元禄会のネットワークに入らない新たな人々によって流行会の「江戸趣味」研究が始められたのである。そして、江戸に対する彼らの視線も元禄会とは異なっていた。

表7 江戸趣味研究会を構成する特別委員

氏名	属性
幸田露伴(1867-1947年)	小説家
●佐々醒雪(一政 1872-1917年)	国文学の研究者
邨田丹陵(1872-1940年)	日本画家
●塚原洪柿園(1848-1917年)	旧幕臣, 小説家
○中内蝶二(1875-1937年)	『萬朝報』記者, 小説家, 劇作家。日本俗曲全集の編者
井上剣花坊(1870-1934年)	川柳作家
斎藤隆三(1875-1961年)	風俗史家, 美術評論家
●久保田米斎(1874-1937年)	日本画家, 舞台美術家
○饗庭篁村(第1回より 1855-1922年)	小説家, 劇評家
○伊原青々園(第2回より 1870-1941年)	演劇評論家, 劇作家

註)『三越』第3巻3号(大正2年)より作成

● = 元禄会に参加経験あり

○ = 聯合研究会のみ参加あり

生没年・属性については、『日本人名大辞典』(講談社)を参照した。

第1回の会合は特別委員選出から間もない、12月20日に開催された。そして、「先づ江戸の如何なる時代を目標として研究すべきかに就て討議さるゝ処あり、享保より文化文政に涉りて第二期江戸時代とするの妥当なる事を決議し、尚其精粹^{エッセンス}ともいふべき天明時代を最も主として研究する事に決定」した。⁽⁵⁴⁾研究の対象は元禄期ではなく「第二期江戸時代」の「精粹」である「天明時代」となったのである。

第2回の会合は翌大正2年1月31日に開催され、流行会幹事三名(巖谷, 笠原, 松居)も参加して具体的な研究方法が議論された。そして、テーマは「黄表紙の研究」となり、四十数種の黄表紙から言語風俗その他数百項を選び、演劇, 音楽, 遊郭, 飲食, 遊戯, 服飾などの項目に分けたうえで、各自それぞれの関心によって研究をすすめる、という方針が決まった。PR誌の記者が「此研究は当初の予想よりは、余程科学的に、余程組織的に実行されて行く曙光が見えてまゐりました」と述べているように、三越側にとっても予想以上に学究的なものであった。⁽⁵⁵⁾

その後、流行会への経過報告はあるものの、江戸趣味研究会の活動の詳細は不明である。おそらく編集作業に入ったためであろう。4月8日の流行会では、江戸趣味研究会より佐々が「西鶴に顕はれし物価ことに衣類の価値」を、井上が「古川柳より見たる江戸の花見」の講演を行っている。⁽⁵⁶⁾前者は元禄会以来の関心としながら、最後には享保以降の展望を述べており、後者は元禄前後から

享保の古川柳を中心としつつもその後の随筆と比較して花見の違いを「想像」しており、江戸趣味研究会の関心が元禄以降に移っていることを示している。また翌5月8日には久保田が経過報告と黄表紙中の挿絵について、斎藤が随筆等と黄表紙上の服装について対照・検討した結果を報告している。さらに、10月10日の公開講演会で、横山健堂「琉球の女」とともに斎藤が「江戸時代の模様物について」⁽⁵⁷⁾を話している。

こうした研究会の成果の結実が、7月より『三越』誌上で4回にわたって「流行会編纂」として連載された「江戸趣味研究資料」⁽⁵⁸⁾である。これは、「天明元年、開版の黄表紙中より、風俗、習慣、流行等に関する章句を、抜粋採録し、これを各部に類別して、左記諸氏（*江戸趣味研究会のメンバー10名）の閲覧を請ひ、其註解を加へしもの」⁽⁵⁹⁾であった。対象とした黄表紙は「翠溪加賀豊三郎君」⁽⁶⁰⁾の所蔵する計56種で、これを「服飾」（担当は斎藤）、「演劇、音曲、遊郭」（伊原青々園）、「器財、玩具、招牌」（饗庭・斎藤・久保田）、「祭礼仏会」（塚原）、「容飾」（斎藤）、「飲食」（幸田・久保田）、「通言」（佐々）、「雑」（佐々・久保田）の部に分けて掲載している。総勢わずか10名というこの研究会がかなり労力をかけた一大事業だったといってもよいだろう。その連載の1回目に、佐々醒雪は企画立案者の私見として、「緒言」⁽⁶¹⁾を記し、企画の意図を述べている。

まず、基本的な編纂の方針については、以下のように述べる。

（前略）この研究は、なるべく速断を避けて、根本資料の蒐輯を先にするといふことである。されば先づ黄表紙中に見ゆる、風俗に関する事柄を類別して、その類別表が段々に集まつて、遂に風俗史上の立派な断案が出来上るといふことを主眼とした。そこで久保田米齋君が専ら黄表紙中の文句の抜粋とその大別とに従事せられ、これを数人の人々が分担して更に細かく類纂彙集する。その彙集の際に気の注いた所には、多少の私注をも加へることにしたが、その私注は担任者の私見であり、且つ必しも博引蒐搜の労をとるの要なしと申し合せた。蓋し風俗上の事物や名称の解釈説明は、この研究の漸を逐うて進むに従つて明瞭となるべき筈のもので若し初から悉く明確な説明が下され得るものならば、我等がかくも手数のかゝつた研究を重ねる必要はないのであらう。速断は我等の最も忌むところである。（後略）

記事の抽出と大別には久保田米齋があたり、これを数人が分担して編集した。そして、編纂の目的はあくまで基本資料を提示することであり、「速断」は避け、注釈は最小限にとどめて今後の研究を待つとしている。それぞれの黄表紙の文脈を断ち切って、記述を「類別」するということが自体、当時の資料翻刻に比して客観性が後退する感は否めないが、あくまで原資料の記述にこだわった原資料主義であった点は注目される。また、「類別」に三越側からの要請があったのか不明であるが、研究者や好事家以外の『三越』読者への便宜を図ることができたといえよう。佐々はこの文章の結びの部分で、次のように述べる。

（前略）若し又この研究が上元文に及び、下寛政を終へ、且つ洒落本、川柳、狂歌より、同時代の記録にまで、行き渡るを得たならば、従来唯軽文学の一盛期としてのみ看過された天明期も、風俗史上の重要な時代として、天明振といふ新しい流行は、恐くは元禄風や桃山式や乃至有職模様を圧倒するに至るであらう。我が流行会はこの新流行を將に作り出さうとしてゐるのである。（後略）

三越の流行研究会の一部門である江戸趣味研究会としては、その目標は、「天明振といふ新しい流

行」の創出にあった。ちなみに、「元禄風」はこれまでの三越の発信してきた流行を、有職模様は白木屋の藤原式模様などを指していると思われる。こうした既存の「伝統」を利用したデザインとは異なる、あらたな「伝統」利用の提案であった。「類別」はそのための作業でもあったのである。

では、なぜ黄表紙なのか。この点については、次のように述べている。⁽⁶²⁾

(前略) 由来江戸の写実的文芸といへば、化政度に唯一の三馬ある外は、安永天明に限られてゐる。馬琴や京山や種彦や、よしや所在に當代の風俗を描いたものが混じてゐるといふとも、その大体は古伝説の反復である、支那小説の翻案である。真に自己の見聞を描き、江戸の真相を傳へてゐるものは、洒落本が禁止せられて、黄表紙が合巻と化した時代を以て終つてゐる。浮世絵類は結構な資料ではあるが蒐輯の労が容易でない上に絵虚言が尠くない。二番目物の脚本も多く散逸した上に、今の着つけは勿論時代を逐うて変化してゐる。その他に好事家の記録や隨筆はないではないが、それが如何ばかり信用すべきかは常に問題である。ことに該博なるお江戸通の諸先輩を煩して、今更に、ありふれた嬉遊笑覧や守貞漫稿や燕石十種の研究でもあるま(*い脱か)といふ以上は、黄表紙、洒落本を採ることが當然な順序ではあるまいか。中にも洒落本は余りに遊郭本位で資料として黄表紙の廣きに及ばない。加之、黄表紙には頁ごとに當代の活写を主とした挿画がある。それほど立派な資料があるのに、何の思ひ惑ふことがあらうぞと。先づ便宜に任せて、黄表紙類の最も豊富な天明年間より始めるのが最も当を得たものではあるまいか。これが自分の私案を立てた所以である。(後略)

『嬉遊笑覧』・『守貞漫稿』や『燕石十種』といった既刊の隨筆類に頼る江戸風俗研究からの脱却を目指し、「江戸の写実的文芸」を追求した結果なのだというのである。さらに、化政期は式亭三馬を除き、風俗の記述も混じるものの、多くが「古伝説の反復」や「支那小説の翻案」であつて、「江戸の写実的文芸」は安永天明期にしかなく、さらに、洒落本は「洒落本は余りに遊郭本位」であるので、挿絵も豊富である黄表紙こそが、風俗資料として最適だと考えた、⁽⁶³⁾ というのである。

以上は、佐々の「緒言」の後半に示された資料の選択や方針、目標といった企画立案の直接の説明であるが、本稿で注目したいのは、前半の安永天明期を重視する記述である。なぜなら、佐々が前半を「思はずも筆が岐路^{わきみち}に入つた。こんなことは研究の結論を見てから断すべきことで、僕のかゝる豫想が果して的中してゐるや否やは、今後の研究を待つて定むべきことであつた」としめくくつて⁽⁶⁴⁾ いるように、前半部に佐々自身が「豫想」とする彼の江戸文化観が示されているからである。

佐々は、2つの江戸文化観を批判する。第1は、従来残花らが主導し、三越が進めてきた元禄期⁽⁶⁵⁾ を重視する見方である。佐々は次のように述べる。

(前略) 元禄を以て江戸を代表せしめようとする人もある、現に江戸文学即ち元禄文学であると思つてゐた時代もあつた。なるほど元禄期は門左や西鶴や芭蕉を生んだ近世文運の最盛期である。元禄風といひ元禄模様といふ名称は、潤達な気風、絢爛な色彩を聯想せしめて、風俗史上に一盛期を劃してゐるには相違ない。しかし門左や西鶴は上方者である。芭蕉も伊賀の田舎漢である。蕉風の俳譜のみは江戸を中心として諸国に波及したといはれないでもないが、しかも芭蕉翁桃青は足跡全國に徧く深川の在庵は僅々三四年、その七部集も多く地方で編纂せられた。だから元禄は荻生徂徠が小むづかしい古文辞を外にして、江戸の文藝といふべきものはない時代である。さればこれを大奥に見ても、五代將軍の御生母桂昌院が盛に京都風俗を移入せ

られる、今様風流舞の踊子は京都の特産である。元禄の柳営は上方風の摸倣に忙しい。これを市井に見ても、鉢巻した見物人が金平まがひの筋隈や外良売の軽口にたわいもなく喝采してゐる。吉原の遊君が如何に艶美を競うても、西鶴の所謂江戸女、「遍く不束に足平たく、首筋必ず太く、肌固く、……(*原文ママ) 嘗て慰になり難し」といふ有様を脱し得ない。かるが(*原文ママ) 故に、元禄は決して江戸風俗を代表すべきものではないのである。(後略)

要するに、元禄期は上方の影響を強く受けたため、江戸独自の文化は生まれていなかったという評価である。そして、「現に江戸文学即ち元禄文学であると思つてゐた時代もあつた」とするよう

に、すでにその立場は過去の物になっているとみている点も注目される。⁽⁶⁶⁾

第2は、化政期を重視する見方である。佐々は以下のように批判する。

(前略) 江戸の江戸たるは化政度以降の風俗にある。田舎源氏に残れる大御所の全盛、梅暦に描いた深川の艶色、さては豊國や北齋や廣重や、洗ふが如き仇姿、すつきりとした男振、五分のすきもないキビ―としたもの、所謂意気なといひ氣のきいたといひ、イナセなといふ類のものは、げにこれを化政度以後に求めねばならぬ。かの羽左衛門や源之助や江戸趣味の名残があるといはれるのはこれが爲である。歌澤或は新内の旋律が、動もすればお江戸通の随喜するところとなるもこれが爲である。だが、これが果して眞のお江戸であらうか。我々は、否、尠くとも自分一人はそのあまりに洗煉しきつて行きつまつた様な、磨き磨いて細くなつた様な、何となく心細い物はかない趣きに飽かないものである。常盤津の見台には未だ武骨な趣があると嘗て塚本博士もいはれた。僕はそこを心丈夫に感ずる。新内や歌澤にはその武骨なものが悉く消磨し盡されてゐる。

武骨とか古拙とか乃至は今日の語でいふプリミチーブな風がなほ存してゐる時代、そこに豊富なる趣味は発見せられるのではあるまいか。僕はかるが(*原文ママ) 故に化政度以上に遡らうと思ふのである。(後略)

こうした見方は、外国への滞在を経て「江戸趣味」へ傾倒していった永井荷風や、明治41年末ごろより明治45年にかけて展開した木下杢太郎らの文芸運動「パンの会」⁽⁶⁷⁾に代表されるような、異国情緒やエキゾチズムの視線で「南蛮趣味」とともに「江戸情緒」をとらえていく新たな「江戸趣味」を指していると思われる。前段の「元禄風」より、当時はこの化政期を中心とする「江戸趣味」に主流が移っていた。佐々は、当時も残っていたという「意気」「イナセ」や、「歌澤或は新内の旋律」といった音曲など、化政期を「江戸趣味」「江戸通」の象徴となるものが成立した時期としては納得する。しかし、これらは「洗煉しきつて行きつまつた様な」ものであり、むしろ「武骨とか古拙とか乃至は今日の語でいふプリミチーブな風がなほ存してゐる時代」にこそ「豊富なる趣味は発見せられる」と説いている。

こうして江戸文化に関する2つの見解を批判した上で、元禄期より化政期の幕府の文化政策については、以下のように述べる。⁽⁶⁸⁾

(前略) 享保の治がある。この時代には元禄時代の極端な奢靡の俗は禁ぜられた。しかし当代の指導者新井白石は一面に詩人であつた。一切の趣味好尚を風俗の賊と見るほどの没分曉漢^{わからずや}ではなかつた。天明には文武奨励の令が雨下したといはれる。しかもなほその割合には大まかなゆつたりとした所があつて自由なる澆漓たる江戸氣質は未だ活動する余地を有してゐたのであ

る。(後略)

そのため、佐々は服装にも「圧迫せられた変通に陥らない所に頼もしい面白味がある。」として⁽⁶⁹⁾いる。このように政治の干渉がないとし、政治体制としても「元和偃武より二百年（*原文ママ）を経て、中央集権の勢は漸く鞏固に、京阪の文物は盡く江戸に同化せられた、新しい江戸気風は自ら醸成せらるべき時であつた。」として、「自分には享保から安永天明を経て寛政の半に至る時代、即ち假に天明時代とも呼ぶべき時代が、最もよく江戸の風俗を代表してゐると信ずる」という立場に至るのである。そして、その文化の特徴として、江戸音曲（「新しい江戸節河東や双笠は新に発達した。一中節も常磐津も、上方風の滑りを棄て、新に江戸児風に養成せられた。」、俳諧（「閑寂な蕉風は上方に追ひ払はれて、江戸座という潤達の新派は生じた。」、天明狂歌などの文芸（「鯛屋風の狂歌は顧られないで、風来や蜀山の狂歌が生じた、黄表紙も洒落本も川柳も同じ流である」）、「地本屋の全盛」(「さしもの八文字屋も山本も京阪には招牌かける軒も無なつて五十間の蔦重が通油町の表店を張る勢)、浮世絵における「江戸絵」(「西川派の下ふぐれが流行におくれて、鳥居、勝川、北尾、歌川の輩出、浮世絵といへば江戸絵と限る様になつた)、芝居の「江戸奴、丹前風」を實踐する十八大通などをあげている。佐々にとって「小心な上方者には、到底真似のならぬ、一種の潤達なやりつばなしな、行きつまらぬ心持で、しかも亦偏に華美な元禄風でもない。そこに研究者としての最も深い興味がある」のであつた。

本人も断っているように、佐々の評価が江戸趣味研究会で全面的に支持されたかは不明であるが、江戸趣味研究会の成果は、それまでの元禄風と永井荷風に代表される化政期以降の江戸趣味と一線を画した「天明時代」「天明調」を「新流行」として提案されたのである。

2、三越における実践との関係

では、こうした佐々ら江戸趣味研究会の活動は、三越の商品開発や流行発信に、直接にはどのように反映されたのであろうか。江戸趣味研究会が天明を対象とする方針が決めてから2ヶ月後の大正2年2月には、早くも「懸賞裾模様図案募集」の7つ課題の1つとして「錦絵風」とともに「天明振」が流行会の投票で選ばれている⁽⁷¹⁾。また、この時期のPR誌『三越』では、浴衣の柄などで「江戸趣味勃興の傾向」を強調している。

しかし、実際の当選図案では、42点のうち、「天明振」は最下位の8等13点と7等5点にすぎず、「錦絵風」も2等1点・5等1点・6等2点・7等3点・8等7点とふるわなかつた。そして、次の7月の「懸賞裾模様図案募集」の課題は「無題」⁽⁷²⁾となつた。「われらが望みをかけたる過去の太平を追懐すべき明治年代の記念的様式も、将来の繁栄と進運とを象徴すべき大正模様も、未だ渾然たる一箇の様式として唱導するに足るべきものなかりしは、当店の甚だ遺憾とする所、若し夫れ江戸趣味模様に至つては、わが流行会に於て率先其研究に従事し、昨年以來着々其歩を進め世間又其流行を認め来りつゝあれども、尚之を以て流行会の統一点となすべき勢力を認むるに至らず」としている。応募を促す広告文ではあるが、「元禄模様」が「過去の太平を追懐す」るものであつたことや、三越が着物について有力な柄を開発できていないこと、江戸趣味の準備に入りつつもまだ熟していないことは実際の三越・流行会の認識を示していると考えてよいだろう。結局、流行会が選んだ一等は「古代更紗」⁽⁷³⁾であつた。

この「古代更紗」の発表と同時に、10月には「江戸振髪飾及袋物陳列会新製品」が発表された。しかし、この商品は江戸趣味研究会の活動とは無関係であった。この新製品の発表の経緯は、「近頃復興したる江戸趣味は今や衣服の意匠よりも、寧ろ持物の方に傾いてまゐりました⁽⁷⁴⁾」として、「閑寂清淡の裡、別に奇抜痛快な技巧を用ひた新江戸模様を幾百となく創作し、転写し、これを髪飾袋物に応用致しましたので、意外に現代向きなものが沢山出来、販売するというものであった。そして「江戸時代に行はれた髪飾及び袋物等数百点を陳列致し」、「此数百年若くは数十年以前の流行たる江戸振諸品を新らしい江戸振に御比較遊ばしますと、如何に大正といふ新代を背景とした江戸振が、其当時と異なりながら、しかも同じ系統の気分を示して居るかといふ處に、深い興味を御感じになる事と存じます」としている。江戸時代全般の「江戸振」とこの「新らしい江戸振」が「系統の気分」でつながっているという説明から、江戸趣味研究会の活動とは無縁のデザイン開発であったことは明らかである。

三越における「江戸趣味」の宣伝の最大の催事は、大正4(1915)年6月に行われた「江戸趣味展覧会」であった。旧館の三階全てを使っておこなわれたこの催しは、流行会の主催だが「今度は江戸趣味を専門に研究して居る江戸趣味研究会員の主催と云つてもよい位⁽⁷⁵⁾」とされることから、三越による江戸趣味研究会の成果の表明の1つと考えてよい。

実は、この年には大きなイベントがあった。三越が元禄模様の源泉として重視し続けた、尾形光琳の二百回忌である。この展覧会の時期は、光琳の二百回忌に合わせて設定されたと思われる。そして、全体の会期は6月1日より15日であったが、会期の最初にあたる1日から3日は「光琳遺品展覧会に、其領内の過半を譲ることになったので、総幕出揃は其五日から⁽⁷⁷⁾」と、会場の過半が光琳遺品展覧会にあてられた。ちなみにこの日には、京都でも妙顕寺において三越の京都支店の主催で追善法会と講演会が、また京都図書館で有志による光琳遺品展覧会が開催されていた。東京の光琳遺品展覧会の発起人は、東京美術学校の創立にかかわり、帝室博物館美術部長を退職したばかりの美術史家今泉雄作(1850 - 1931年)ほか27人で、三越は「此三日間だけは江戸趣味展覧会の領域が多少蚕食さるゝかもしれませんが、同じ徳川時代の一現象として此光琳の遺品を同じ場所で見ると、却つて興味のふかい事と存じます⁽⁷⁸⁾」とその共存の意義を説明している。さらに、二百年忌日にあたる6月2日の夜午後6時半からは、三越旧館第二階で流行会の主催により「光琳二百年忌辰江戸趣味展覧会紀年講演会」を開催し、光琳の茶室を紹介した今泉雄作の「茶室と光琳」、「重に江戸趣味に関するもの⁽⁷⁹⁾」であった佐々による「江戸特有の趣味」の2つの講演が行われた。この光琳と江戸趣味を扱った両講演は、「其演者と演題とは、美術文学に興味ふかき人々の興味を刺激したものと見えまして、午後七時といふに聴衆早くも五百人を越え、入場を謝絶せんばかりの有様⁽⁸⁰⁾」と、講演会は成功をおさめている。そして、江戸趣味展覧会も盛況で、会期を6月15日から20日まで延長したのである。

では、展覧会の内容をみてみよう。すでに三越では、児童博覧会、展覧会についても「広告画の展覧会」「劇に関する展覧会」を経験し、とくに古今東西の演劇を扱った後者は成功を収めていた。こうしたノウハウをもって実施された展覧会の主旨は、準備段階の宣伝によれば、以下のようなものであった⁽⁸¹⁾。

(前略) 本年は東京市に於て家康公の三百年祭が挙行されますので、此機会を利用して、かねて

の蘊蓄の一部を世間に発表することになったのでございます。江戸の趣味に関するものは、文学といはず、芸術といはず、社会万般の事物に涉って、諸家の出品を乞ひ、江戸文明の精華を一堂に集めて見やうといふ江戸趣味研究会員諸氏の努力、去二十日には特別委員会を開き、そろへ―其実行にとりかゝつて居ります。(後略)

そして、三越は「此度の展覧会が江戸趣味の研究に、回顧に、至大の貢献する所あるべきは申上る必要もございませうまい。」と述べている⁽⁸²⁾。ただし、展示対象は「江戸文明の精華」すなわち江戸趣味全般であり、企画が江戸趣味研究会であるにもかかわらず、「天明振」にはまったく触れられていない点に注意しておきたい。

展示は、衆目を集めるため、旧館の階下に魚河岸の龍神の山車を据え、その前に魚河岸・市川團十郎・日本橋芸妓中の大提灯を飾っている(写真10)。三越自身、「山車の人形が展覧会場に於ける江戸式雰囲気を一層濃かならしむべく、三階の会場の付近で衝出でたるは、当局者が苦心の設備の一つ⁽⁸²⁾」としているような仕掛けであった。三階の展示品の出品の点数は「無慮一万五千余点」、出品者数は184名(三越の集計は「百八十六名⁽⁸⁴⁾」)であった。その詳細は『三越』に掲載された出品目録⁽⁸⁵⁾で知ることができる。目録は出品者別であるが、展示場の写真にみるように(写真11～22)、実際には種別ごとにまとめて展示していたと推測される。出品者について表8および論文末の付表1に、展示品について付表2におおまかな種別ごとに大別して示した。表8に示したように、出品者184人(出品総数964件)中、約4分の1にあたる49人(202件)は属性が確定できないが、残る136人(766件)のうち、流行研究会員は6人(19件)、三越・三井関係者は10人(30件)で、このほか旧大名家が7人(139件)、ほか画家・美術関係者、芸能関係者、文芸・文筆・出版、研究

写真10 江戸趣味展覧会会場
(『三越』第5巻第7号, 1915年)

者、収集家として知られた者、実業家や榮太郎などの江戸以来の商家、八百善などの料亭、吉原ほかの遊郭、資料保存機関など、多岐にわたっていることがわかる（表8・付表1）。三越・三井関係者、流行会会員や旧大名家については出品を指示・依頼したと思われ、またそれ以外にも依頼を受けた三越や流行会の関係者がいたと思われる。しかし、PR誌に「本誌の原稿締切までに出品を申し込まれた方々は驚くばかり多数で、其の範囲階級もまたなか〜⁽⁸⁶⁾広く」とあるように、階層が多岐にわたったのは公募の手法をとった結果と思われる。とくに注目されるのは、実業家も含む市井の商家23人（114件）、遊郭・料亭23人（99件）である。彼らの参加は、「江戸」への関心や、「江戸」を商売の宣伝に利用しようとする意識が広がっていた証左であろう。そして、展示品も多種多様で、時期も17世紀から19世紀まで多岐にわたった（付表2）。また展示品は、冒頭にまとめた徳川家や幕府にかかわるものや大名家のものから、うどん箱・けんどん箱といった市井のものまでさまざまな階層差があった。たとえば染織品は消防関係を除いても253件と最多であるが、大名家の装束から、吉原の遊女、庶民の「豆絞りの手拭」（付表2-476）や「刺子」（付表2-365・366）までみられる。出品の基準はおそらく明確ではなかったと思われる。そして、三越側は、「三階に上るとまづ目につくは、京浜各地の花柳界の人々より出品されたる手古舞の上着、立付、肌脱の襦袢などで、これは現代に其面影をとどめて居る江戸趣味の一斑を示したもので、此会の目的からいふと是非開館第一の場所に陳列さるべきものであつた⁽⁸⁷⁾」と述べるように、同時代のものに至るまで「江戸趣味」があらわれた品を一同に会することが目的だったのである。

このように、江戸趣味研究会では、その研究対象を天明期にしほり、「速断」を避けて資料集の編纂という基礎的な作業を実施し、その上で「天明振」の提示をめざした。しかし、実際の三越の商品開発や流行発信では直接に生かされることはほとんどなかった。そこで発信されたのは、時期も階層も限定のない、感覚的なイメージとしての「江戸」であった。そして、江戸趣味展覧会の際に発信された柄は、大正4年2月に募集した、光琳二百回忌にかこつけた華やかな「新光琳模様」であった。それは、10月に予定されていた大正天皇の即位式における「社交界」の需要を意識した

表8 江戸趣味展覧会の出品者内訳（『三越』第5巻7号<1915年>より作成）

属性	人数(人)	割合(%)	出品件数
流行研究会	6	3	19
三井・三越	10	5	30
旧大名家	7	4	139
画家・美術	11	6	94
芸能	8	4	19
文芸・文筆・出版	19	11	96
研究	10	5	41
収集・骨董	11	6	83
実業家・商家・町・仲間	24	13	115
遊郭・料亭	23	13	99
資料保存機関	2	1	4
その他	6	3	31
不明	47	26	194
合計	184		964

写真11 江戸趣味展覧会展示
「厨子棚書棚黒棚其他調度類(青山子爵家御所蔵)」
(『三越』第5巻第7号, 1915年)

写真12 江戸趣味展覧会展示
「元禄時代黒塗大箆筒一引出の底櫛子となりをれり」
(『三越』第5巻第7号, 1915年)

写真15 江戸趣味展覧会展示「納札富札調度類陳列」
(『三越』第5巻第7号, 1915年)

写真16 江戸趣味展覧会展示
「蒸籠其他器具類(山村耕花氏御所蔵)」
(『三越』第5巻第7号, 1915年)

写真19 江戸趣味展覧会展示「徳川時代各種衣装類陳列」
(『三越』第5巻第7号, 1915年)

写真20 江戸趣味展覧会展示「消防装束類陳列」
(『三越』第5巻第7号, 1915年)

写真13 江戸趣味展覧会展示
「江戸三織の一 日本橋馬喰町四丁目(誠誼会御所蔵)」
(『三越』第5巻第7号, 1915年)

写真14 江戸趣味展覧会展示
「江戸時代詩人墨客書画及所用品」
(『三越』第5巻第7号, 1915年)

写真17 江戸趣味展覧会展示
「調度類(江戸八天秤煙草屋筆筒刺繍帛紗等)」
(『三越』第5巻第7号, 1915年)

写真18 江戸趣味展覧会展示
「大江戸図 鍬形蕙斎筆(松平子爵家御所蔵)」
(『三越』第5巻第7号, 1915年)

写真21 江戸趣味展覧会展示「簸川上 神田佐久間町山車」
(『三越』第5巻第7号, 1915年)

写真22 江戸趣味展覧会展示「江戸年中行事陳列」
(『三越』第5巻第7号, 1915年)

「極めて典雅優麗な、それで戦勝国民としての豪放絢爛を失わない」柄として提案されたもので、江戸趣味研究会の研究活動とは無縁だったと言っても過言ではない。⁽⁸⁸⁾

3、白木屋の「新江戸模様」

以上の三越の江戸趣味研究会の成果の実践に影響を与えたと思われるのが、ライバル店白木屋の「新江戸模様」の提案である。江戸趣味研究会の活動開始から半年ほど遅れた大正2（1913）年7月、白木屋は「藤原式模様」から一転して、再び江戸を対象とした「新江戸模様」を提案し、裾模様の図案を募集した。募集の説明文では、江戸時代は鎖国によって「純粹の邦我趣味を基礎」とした「平民的嗜好」の模様が発達した時代であり、これまでの流行創出が「明治中年」に「泰西文物の謳歌時代」の「反動」として展開し、江戸趣味が起りつつある現在に「新江戸模様」は好機だと宣言して、次のように述べている。⁽⁸⁹⁾

（前略）邦我趣味主張の声諸方面に起り、同時に図案当業者間にありても、俄に日本趣味の復興を企てんとして、遠く古代に遡り、天平又は藤原、鎌倉乃至は足利、桃山と、資材を各時代に求め来りて、ひたすら時需に適はしめんとして、肝胆を砕くこと、又一再ならず、而して（中略）漸次流行の変遷急遽となるに伴れ、その流行様式の短命なること、僅々半歳を超ゆることのなきが如し、斯くして迫時復興を続行し来りし時代様式も、到底時需を満たす能はずして、最後に、最も親しく、現代に接近せるを以て、却て吾人の視界を脱したりし、江戸時代に着目し、時流今や、漸くこゝに向はんとするの、傾きを生じ、間江戸趣味の話に耳にするに至る、茲に於て、早くも、この純日本式にして、且平民的なる間に、自ら類を異にせる、一種独特の趣味のある、江戸時代模様を捕へ、これが復興式とも称すべき、一様式を興さば、必ずや現代趣味の趨勢に投合し、高評を博さんこと疑なきを想ひ、はじめて、この新案模様をかゝげ、題するに新江戸模様を以てするに至る、而して例年に倣ひ裾模様図案懸賞募集を機とし、弘くこの新様式の下に図案を募り、以て大に世に紹介し、飽く迄大江戸の時代空気を味はんとす（後略）

さまざまな時代に「日本趣味の復興」のための模様の材料を求めていっても結局半年しか流行は続かなかったが、ついに現代に近いために注目されなかった江戸時代に関心が向いてきたとしている。この大正2年には、2年後の家康没後三百年祭の挙行が発表されているが、これは「徳川宗家を始め諸侯の賛同を得て協議会を開き」と徳川家と旧大名家が主体となったもので、その「祭典は純江戸趣味によりて行ふ計算」であった。⁽⁹⁰⁾このような「江戸」への関心も利用したのであろう。そして、元禄期のみならず、江戸時代は直近の「過去」としてとらえられるようになったのである。しかし、その募集の対象はおおまかで、「慶長、寛永の素朴、貞享元禄の妖艶、或は宝暦の華奢、文化、文政の緘寂と言ふが如し」「各期特徴」に着目しても、「江戸全期を総括して、其間に包含さるゝ所の気分を捕へらるゝ」も、「総て考案者の自由に任すべし」というものであった。⁽⁹¹⁾ 当選した作品について、新聞では以下のように評されている。

（前略）元禄や友禅など、異つて濃艶華麗ではないが、濃艶華麗に飽いて寂とか渋みとか云ふ心持を慕つてゐるところが嬉しい。殊に此の江戸趣味は江戸と云ふ時代の觀念に支配されないで、今まで研究し応用して来たあらゆる時世粧を加味して新に試みたものであるから面白い。（中

略)要するに白木屋の江戸趣味は、温故知新を実現した明治聖代の気分を表はし得たと云ふことが出来る。(後略)

また、商品化されたものについて、白木屋自身は「大体を申せば、先づ江戸時代の渋き縞柄等を応用しまして、巧に模様を案じたもので、頗る粋なものでございます⁽⁹²⁾」と述べている。

白木屋が提案した「新江戸模様」は、元禄模様とは異なる「渋い」ものではあったが、それは時期を特定しない茫漠としたものだったのである。さらに白木屋は翌大正3年6月に、「余りに「江戸」(*原文ママ)てふ二字に拘束せられ「新」の一字を軽視せられたるが為か、寔に当店が期待したるものと相合するもの甚だ尠少なりとを遺憾とす⁽⁹³⁾」として、再び図案を募っている。

三越はすでに江戸趣味研究会が天明期をテーマとして活動を開始し、模様を募集したものの、不発に終わっていた。そして、白木屋の「新江戸模様」が表現する茫漠とした「江戸趣味」像を凌駕するのは困難になったと思われる。大正4年開催の江戸趣味展覧会で表された「江戸趣味」は白木屋と同様に茫漠とした江戸を表現せざるをえず、光琳二百回忌に併せた「新光琳模様」を提示することで差異化を図ったのではなかろうか。なお、白木屋は、三越の江戸趣味展覧会が開催された大正4年6月の募集では課題を「天平模様」に移している⁽⁹⁴⁾。明記されてはいないが、おそらく同年10月に予定されていた大正天皇の即位式をにらんだものだったと思われる。

おわりに

まず、日露戦後の元禄ブームは三越が起こしたもので、その際に関係を形成したのが、元禄会である。ここでは、元禄期に限定して、さまざまな事象や、時代の評価、そして模様の転用の是非が議論される。茶話会と実物の展示も伴った文人的世界をひきつぎ、とくに実物展示のスタイルは三越に踏襲された。ただし、実際には元禄会は戸川残花の私的なネットワークで成立したもので、三越が創出したわけではない。おそらく、代表戸川残花の白木屋顧問就任や、三越直営の流行会が機能したこともあって、第2回をピークに、関係は薄くなる。元禄会自体は、最後は文芸協会との聯合研究会で終焉する。また、元禄ブーム自体も失速する。

次に「江戸」の商品化がはかられるのは大正期で、流行会員の発案から分科会として江戸趣味研究会が誕生する。彼らは対象を天明期に絞り、資料編纂の上での研究、「天明振」の提案を目指した。しかし、むしろ「江戸趣味」については、世間の風潮が先行し、模様としては白木屋の「新江戸模様」の方が成功する結果となった。元禄会の主導者であった戸川残花は、くしくも江戸趣味展覧会が行われた年、一般の「江戸趣味」を批判している⁽⁹⁵⁾。「文化文政天保になると趣味は著しく繊巧となり、物事がたゞ手先の器用となつた」「こういう繊巧な江戸趣味の滅亡を私は決して惜しいとは思はない」「近頃よく江戸趣味を云々する人は金儲の出来ない、肺病でもありそうな、蔭では腹を立つても思いへ出しては云はれないといふやうな人が多い」として、「所謂江戸趣味といふやうなものがどしどし凋落して行くのも時代趣味の変遷」だとする。そして、元禄を対象にする理由について、「吾々の江戸趣味として最も尊ぶのは寧ろ元禄享保の大まかな趣味」「京都趣味を江戸化した」もので、「大名も旗本も役に立たたなくなる」前、「武士の凋落」前である点を指摘する。残花の立脚点は、幕末を生き、旧幕臣の復興運動に加わった旧幕臣という出自にあった。

一方、佐々酔雪らほとんどの江戸趣味研究会の面々は、江戸は未体験の過去であった。しかし、彼らが求めたのは、永井荷風やパンの会にみられる異国趣味の一亜種である、実態のない、また変化しないノスタルジーとしての江戸趣味とは異なる。たとえば荷風について、郡司正勝氏は、荷風の作品の「(前略)新時代の色々な野心家の汚らしい手にいぢくり廻されて、散々に慰まれ辱められた揚句、鬪り殺しにされてしまふ傷しい運命。それから生ずる無限の哀愁が、即ち江戸音曲の真生命である(後略)」(「妾宅」明治45年)という記述などから、「荷風自身は、江戸の音楽は、すでに完成した音楽だから、新曲は、蛇足であり徒労だという意見を持っていた。これが逍遙と違うところであった。逍遙は、これらの江戸音曲をもって、新時代の新日本音楽を創ろうとする意図に燃えていたからである。」とし、荷風の「江戸をもって、江戸芸術の完成は終わったのだという自論」⁽⁹⁶⁾を読み取っている。この点においては、荷風の「江戸」はある意味では純粹であった。これに対して、佐々は文芸協会の俗曲研究會の中心でもあり、江戸音曲を研究し、さらにその革新と発展をめざした。「江戸」は異国趣味や現実逃避の場ではなく、研究の対象であった。こうした点では、新たな文化創造として三越の商品開発と目的は合致する部分があったはずである。そして、彼らは「天明時代」に注目し、提案した。しかし、こうした研究活動は商品開発や流行発信では生かされず、時期・階層の無限定な江戸趣味と、元禄を併存した形で展覧会が行われ、「新光琳模様」も不発に終わる。

結局、「江戸」の商品化においては、設立の経緯は異なるにせよ、元禄会・江戸趣味研究会は、流行を引き出すいわば話題作りには機能したが、その成果は実際の商品化には直結しなかった。むしろ、実物の展示と新たな伝統を模した商品を提示することで、白木屋の「新江戸模様」と同じく、江戸を生きたことの無い人々の中に厳密な時期区分のないイメージとしての「江戸趣味」を定位することを助長する結果になったのではなかろうか。関東大震災を迎える前に、「江戸」は商品化の中で永井荷風ともまた異なった、漠然としたイメージになったのである。

その後、江戸趣味研究会というほとんど江戸を体験したことのない人々による江戸研究の方向性は、国文学や、三田村鳶魚の江戸研究に引き継がれていくと思われる。明治から大正の「江戸趣味」の全体像とあわせ、今後の研究課題としたい。

註

(1)——ホブズボーム・レンジャー(前川啓治・梶原景昭訳)『創られた伝統』(紀伊國屋書店、1992年)。

(2)——岩淵『「江戸史蹟」の誕生—旧幕臣戸川残花の軌跡から』(久留島浩・高木博志・高橋一樹編『文人世界の光芒と古都奈良 大和の生き字引・水木要太郎』、思文閣出版、2009年)。「江戸」表象は、近代化論における「江戸時代の遺産」、バブル期の江戸東京ブームから、近年の「江戸しぐさ」、江戸検定や日本橋地域などの都心部再開発における資源としての利用まで、多様である。近年の江戸賛美については、岩淵「創られる「都市江戸」イメージ—その虚像と実像」『週刊 新発見!日本の歴史 30号』(2014年)で批判したが、「江戸」表象の整

理・検討については、今後、稿を改めて論じたい。

(3)——高木博志『近代天皇制と古都』岩波書店、2006年。同「『京都らしさ』と国風文化」(丸山宏ほか『みやこの近代』、思文閣出版、2008年)。

(4)——大久保利謙『王政復古史観と旧藩史観・藩閥史観』『日本近代史学の成立』(吉川弘文館、1988年)、田中彰『明治維新観の研究』(北海道大学図書刊行会、1987年)。

(5)——高木博志『近代天皇制の文化史的研究』(校倉書房、1997年)、同「『郷土愛』と『愛国心』をつなぐもの」(『歴史評論』659、2005年)ほか。

(6)——『日本民俗学』236(2008年)の「特集フォークロリズム」の各論文ほか。

- (7)——神野由紀『趣味の誕生』(勁草書房, 1994年)。
- (8)——『高島屋百三十五年史』(1965年), 『白木屋三百年史』(1957年), 『松阪屋百年史』(2010年), 『松屋百年史』(1969年)。
- (9)——以下, 「伊達模様」と「元禄模様」の概要については, 前掲神野由紀『趣味の誕生』第四章による。
- (10)——前掲神野由紀『趣味の誕生』。
- (11)——『万朝報』明治38年7月25日。同誌では「元禄思想研究会」と紹介している。なお, 人数については, 『時好』明治38年第3巻8号・『読売新聞』明治38年7月25日でも「五十余名」としており, ほぼ一致している。
- (12)——原胤昭については, 『江戸の町与力の世界-原胤昭が語る幕末-』(千代田区四番町歴史民俗資料館, 2007年)などを参照。胤昭は, 残花の「幼時の友達」であった(『読売新聞』明治42年7月21日)。
- (13)——戸川残花の活動については, 前掲岩淵『江戸史蹟』の誕生-旧幕臣戸川残花の軌跡から, 岩淵「旧幕臣と武士道-武士から兵士へ-」(小島道裕編『武士と騎士-日欧比較中近世史の研究-』思文閣出版, 2010年)を参照。
- (14)——『読売新聞』明治38年7月24日。
- (15)——『読売新聞』明治38年7月18日。
- (16)——『読売新聞』明治38年7月24日。
- (17)——『読売新聞』明治38年7月25日。
- (18)——『時好』明治38年第3巻8号。
- (19)——『読売新聞』明治38年7月25日。
- (20)——「元禄会雑感」(上)(下)『読売新聞』明治38年7月25・26日。
- (21)——横山達三「繩張論をやめよ」『史学界』7-9, 1905年9月。
- (22)——『万朝報』明治38年7月25日。
- (23)——秋元興朝「元禄時代観」(『史学界』7-8 8月)。
- (24)——秋元興朝「元禄の芸術」(『史学界』7-9 9月)。
- (25)——『読売新聞』明治38年7月24日。
- (26)——『時好』明治38年第3巻12号。ほか, 『読売新聞』明治38年11月6日を参照した。
- (27)——『万朝報』明治38年11月7日。
- (28)——『肉筆浮世絵大観』一(講談社, 1994年)。
- (29)——東京国立博物館寄託。福島雅子氏のご教示による。
- (30)——『日本』明治38年11月7日。
- (31)——『時好』明治38年第3巻12号。
- (32)——『万朝報』明治38年11月7日。
- (33)——『日本』明治38年11月7日。
- (34)——戸川残花「わが徒然草袖の巻」(個人蔵), 『読売新聞』明治39年2月5日。
- (35)——『読売新聞』明治39年2月13日。島田筑波との関係については, 井田太郎氏のご教示による。島田筑波については, 島田一郎著・加藤定彦編『島田筑波集』(青裳堂書店, 1986年)ほか参照。
- (36)——「(*筆者註 39年)2月4日 三圍神社永峯氏にて元禄会三拾人余あつまる, 三越出品の古代小袖(三■おり), 淀屋小袖(光琳の梅松竹)など面白し, 赤垣にちなみ貧乏徳利に政宗を入れてもてなす, 岡田三面子, 竹冷, 米齋, 東洲, 晴風, 宝水, 福地復一, 天尊, 信賢, 柳嶋, くらい全武の諸子あり」(前掲「わが徒然草袖の巻」)。
- (37)——『読売新聞』明治39年2月5日。
- (38)——『読売新聞』明治39年6月18日。なお, 戸川濱男「戸川家史料」(1963年, 個人蔵)では, 前回の三圍神社の研究会に回数を与えず, この研究会を「三九年六月 第三回元禄研究会主催, 河東節・一中節演奏 於大隈伯邸」としているが, 新聞記事の表記にしたがった。
- (39)——「早稲田の俗曲会」『趣味』第1巻第2号, 明治39年。
- (40)——前掲「早稲田の俗曲会」。
- (41)——『流行』第5巻第5号(明治41(1908)年5月), 『読売新聞』明治41(1908)年5月11日。
- (42)——瀬崎圭二「流行研究会と塚原祐柿園-<江戸趣味>の中の身ぶり-」『國文学攷』第220号(2013年)。
- (43)——「玩具と小道具の会 かなめ家の催し」(『読売新聞』大正3年10月6日)。
- (44)——前掲神野由紀『趣味の誕生』128頁。
- (45)——小野田亮正『現代名士の演説振』(博文館, 1908年)。
- (46)——柴田常恵「残花戸川翁の想出」『桜』第7号, 1925年。
- (47)——山口物外「過去に於ける流行の趨勢」(『流行』第3巻1号, 明治39年), 同「過去に於ける流行」(同前第3巻2号・3号, 同年)。筆者山口は, 川柳の革新運動を行った阪井久良岐の川柳誌『五月雨』にも文章を寄せているが, 詳細は不明である。
- (48)——「現今の流行物の多くは, 大抵, 此店(筆者註白木屋)か, 三越の此二つで作られるのである」(『読売新聞』明治42年5月26日)。
- (49)——『流行』第3巻~10巻。
- (50)——「明治式江戸趣味の発展-白木屋瞥見」(『読売新聞』大正2(1913)年9月17日)。
- (51)——『三越』第3巻1号, 大正2年。神野由紀は, 前掲『趣味の誕生』156~164頁で江戸趣味研究会を検討している。
- (52)——「江戸趣味の勃興」『三越』第3巻1号。

- (53)——前掲神野由紀『趣味の誕生』128～129頁。
- (54)——「流行会の過去一年」『三越』第3巻1号。
- (55)——『三越』第3巻3号，大正2年。
- (56)——『三越』第3巻5号(1913年)所収。
- (57)——『三越』第3巻9号(1913年)，講演の内容は第10号に所収。
- (58)——第1回は『三越』第3巻第7号(大正2(1913)年7月)，第2回は同巻第9号(同年9月)，第3回は同巻第10号(同年10月)，第4回は第4巻第3号(大正3年3月)。
- (59)——『三越』第3巻第7号，大正2(1913)年7月。
- (60)——加賀豊三郎(1872-1944年)は大阪出身の実業家で，古典籍や美術品の収集に情熱を傾け，「集古会」や，珍奇な文物を展覧する「新耽奇会」等，様々な会合に所属し，尾崎紅葉など当代の文化人や名士と幅広い交友を持っていた。その旧蔵書は現在，東京都立中央図書館に加賀文庫(約24100点)として架蔵され，とくに1,000余点の黄表紙と数百点の洒落本のコレクションは，今日でも近世文学研究で重要な位置を占めている(「特別コレクション 第51回 数寄(すき)の人 加賀豊三郎の世界」東京都立中央図書館特別文庫係，2014年8月，http://www.library.metro.tokyo.jp/digital_library/collectionthe45/tabid/3956/Default.aspx)。
- (61)——佐々醒雪「緒言」(前出『三越』第3巻第7号)。
- (62)——註59と同じ。
- (63)——註59と同じ。
- (64)——註59と同じ。
- (65)——註59と同じ。
- (66)——註59と同じ。
- (67)——パンの会については，野田宇太郎『パンの会-近代文芸青春史研究-』(六興出版社，1949年)を参照した。
- (68)——註59と同じ。
- (69)——註59と同じ。
- (70)——註59と同じ。
- (71)——「大正初春の流行会」『三越』第3巻2号，1913年。
- (72)——『三越』第3巻8号(1913年)所収。
- (73)——『三越』第3巻9号(1913年)。
- (74)——『三越』第3巻10号(1913年)。
- (75)——『三越』第5巻6号(1915年)。
- (76)——光琳二百年忌については，玉蟲敏子『生きつづける光琳』(吉川弘文館，2004年)参照。
- (77)——『三越』第5巻7号(1915年)。
- (78)——『三越』第5巻6号(1915年)。
- (79)——『三越』第5巻6号(1915年)。
- (80)——『三越』第5巻7号(1915年)。
- (81)——『三越』第5巻5号(1915年)。
- (82)——『三越』第5巻6号(1915年)。
- (83)——『三越』第5巻7号(1915年)。
- (84)——『三越』第5巻7号(1915年)。
- (85)——『三越』第5巻7号(1915年)。
- (86)——『三越』第5巻6号(1915年)。
- (87)——『三越』第5巻7号(1915年)。
- (88)——『三越』第5巻2号(1915年)，同4号。
- (89)——『流行』第10巻7号(1913年)。
- (90)——『読売新聞』大正2(1913)年7月27日。この時の発表では，上野東照宮での開催が4月15～19日，日光東照宮で6月だったが，実際の挙行は増上寺が4月，日光東照宮が大正4年6月，上野東照宮が9月16～18日であった(『読売新聞』大正4年6月2日，同9月9日)。増上寺の法要の際には，「大名行列のペーゼント」が行われ，三越の店内にも行列が入っている(『三越』第5巻5号，大正4年)。
- (91)——『読売新聞』大正2(1913)年9月17日。
- (92)——『流行』第10巻10号(1913年)。
- (93)——『流行』第11巻7号(1914年)。
- (94)——『流行』第12巻7号(1915年)。
- (95)——戸川残花「江戸趣味の変遷」『日本美術』17-4，1915年。
- (96)——郡司正勝「荷風と江戸音曲」『現代詩手帖』19-4，1976年。

[付記]

脱稿後，目時美穂『油うる日々 明治の文人戸川残花の生き方』(芸術新聞社，2015年)に接した。同書は，戸川残花の子孫戸川安雄氏の『戸川残花伝』(生涯学習研究社，1994年)に続く，残花の伝記であるが，多岐にわたる残花の活動については，歴史学の側で，時代状況と合わせ，その1つ1つを深く検討していく必要があると考える。これまでの分析(註2・13)と今回の分析をふまえ，ひきつづきとりにくんでいきたい。

(学習院女子大学国際文化交流学部，国立歴史民俗博物館客員教員)

(2014年12月1日受付，2015年5月25日審査終了)

付表1 江戸趣味展覧会の出品者
(『三越』第5巻7号<1915年>より作成)

出自	No	出品者	点数	出自
三越流行会	1	塚原澁柿園	4	江戸趣味研究会
	2	齋藤隆三	4	江戸趣味研究会
	3	井上剣花坊	1	江戸趣味研究会
	4	林若樹	1	大供会 収集家 集古会
	5	清水仁兵衛	1	大供会 収集家 清水清風 玩具研究家
	6	廣瀬辰五郎	8	大供会 商家(江戸千代紙伊勢辰) *「江戸趣味おもちゃ絵」(第3回配布) 元岩井町 『読売新聞』1923年2月13日)
三越	7	野崎廣太	1	三越社長(1915年より)。号幻庵。『茶会漫録』12冊を發刊。益田孝と交流。
	8	豊泉益三	3	
	9	児童用品研究会	7	
	10	三越呉服店	7	
	11	藤村喜七	1	
	12	田頭凱夫	7	三越写真部
三井関係	13	三井養之助	1	三井高明
	14	伊達忠七	1	三井物産
	15	益田孝	1	三井物産の設立者
	16	益田英作	1	実業家 益田孝の弟。
華族	17	細川侯爵家	12	旧熊本藩主家
	18	青山子爵家	58	旧篠山藩主家
	19	秋元子爵家	2	旧館林藩主家※
	20	蜂須賀侯爵家	27	旧徳島藩主家
	21	津軽伯爵家	2	旧弘前藩主家
	22	阿部伯爵家	3	旧福山藩主家
	23	松平慈貞院	35	佐賀藩主鍋島直正の長女健子・貢姫
画家	24	淡島寒月	9	※向島須崎町 「有名なる玩具家にして、多年世界各国より蒐めしものを悉く失ひたるは惜むべし」
	25	尾形月三	8	浮世絵師
	26	尾形月耕	19	浮世絵師
	27	山村耕花	3	月耕の弟子 収集家
	28	瀬戸錫之助	2	画家(『征清画報』<1894年>の編者)か。
	29	西澤笛畝	5	人形絵/人形の収集家 大供会?
	30	武内桂舟	5	硯友社の作家の挿絵、巖谷小波と『少年世界』など
美術	31	石川銀治郎	13	彫師(信光)
	32	木内省古	4	木工芸家 竹内久一の弟子
	33	竹内久一	20	彫刻家
	34	吉田永光	6	人形師
芸能	35	常岡常盤津家元	2	音曲
	36	市川宗家	4	歌舞伎
	37	河東節秀翁	1	河東節
	38	清元市寿	2	清元節
	39	伊井蒼峰	1	新派の俳優
	40	田村成義	7	興行師 市村座など
	41	杵屋勘五郎	1	長唄三味線方
	42	市川七作	1	歌舞伎役者
	43	巖谷小波	3	小説家
文芸	44	神谷鶴伴	2	小説家 徳太郎 幸田露伴の弟子 西鶴の収集家 愛鶴書院として西鶴本を復刻する
	45	角田真平	1	角田竹冷の本名。政治家、俳人
	46	上村蛙水	8	俳人
	47	小泉迂外	14	俳人 秋声会 江戸最古の鮎屋華屋与兵衛の末裔
	48	鹿鹽秋菊	6	俳人(『卯杖 4(8)』<1906年>ほか)
	49	篠田胡蝶	2	鉦造 新聞記者、風俗研究家

	50	宮澤朱明	5	俳人, 人形の収集家
	51	桃水	4	半井桃水 小説家
文筆	52	樋口傳	3	『書画骨董雑誌』の編集発行人
	53	金子範二	1	雑誌『生活』主任 ほか著作
	54	佐藤翠湖	1	佐藤巖 新聞記者か 『新聞遍路: 二十五年記者生活録』(松山房, 1931年)
	55	水谷幻花	4	演劇評論家, 硯友社に参加, 万朝報記者を経て, 明治33年東京朝日新聞社会部
	56	田畑千壺	6	「犬の草子」(藝術 12(1), 1934年), 「[勅題俳句] 老乃栞 (昭和2-14年)」作者(宮内庁書陵部蔵)
	出版	57	市場徳兵衛	6
58		江澤菜魚	7	『彫画』の編者
59		坪谷善四郎	4	編集者, 政治家 ※日比谷図書館の設立につくす 新潟県出身
60		熊谷大次郎	11	『嘉なめ草 まき絵 第1号』(1896年)の発行人か?
61		松木平吉	8	小林清親ほかの版画版元 / ※「大平 吉川町」北斎や師宣のほか「浮世絵版画多数」が焼失している
研究	62	笹川臨風	5	江戸風俗史
	63	山中笑	3	風俗史家
	64	吉浦祐二	1	『狩野派大観』(1912年)の著者
	65	川上邦基	2	建築史家か。『日本古建築類聚』(古建築及庭園研究会, 1933年)
	66	鋳形	21	歌舞伎研究家
	67	柴田常恵	1	考古学者
	68	大槻如電	1	仙台藩儒大槻磐溪の次男
	69	鈴木春浦	1	『歌舞伎の型』(歌舞伎出版部, 1927年)の著者
	70	窪田勘六	4	英国グラスゴー万国博覧会出品同盟会の庶務兼会計主任, 『東洋美術大観第13巻支那彫刻之部』『同第15巻 日本彫刻之部』(審美書院)ほか編者
	71	大原鉦一郎	2	研究者(『女子用器画・幾何画法』<目黒書店>明治37年ほか)か。
収集・骨董	72	栗原かなめや	11	神田末広町の美術指物商可奈免家主人栗原金蔵
	73	飯川榮太郎	3	売立の札元の一人「大和屋飯川榮太郎」か(『毛くろく』, [東京美術倶楽部], 1919)
	74	高橋藤	2	集古会, 絵札交換会の企画者
	75	佐野するがや	6	玩具 山三不二 商家 大供会か。
	76	澤京治郎	18	収集家(『古札便覧』関口耕山堂, 1907の著者)か。
	77	野口彦兵衛	1	呉服商大彦
	78	酒井好古堂	16	浮世絵の鑑定と復刻 神保町
	79	大西いせ万	5	千社札の収集家 神田の青物問屋伊勢屋万次郎
	80	加賀豊三郎	13	実業家 集古会員 コレクションは現東京都立中央図書館加賀文庫
	81	橋田素山	5	納札, こけし
	82	永峰	3	収集家か。 三囲神社神主
実業家	83	久保田米三	3	久保田製作所創業者か
	84	白井正助	3	瓢箪屋薬房 現エスエス製菓 か。
商家	85	栗山善四郎	3	八百善 ※吉野町 土蔵一棟が焼失
	86	細田安平	4	榮太郎 ※西河岸町 光琳や応挙は搬出したが, 是真の「寿老鹿図」や曉斎の「雑画冊二十余幀」抱一画の「花鳥絵変能代塗膳」などが焼失している。
	87	宝井善次郎	13	鮎屋 ※堀江町 其角13代目の子孫。其角の遺墨ほか書画の大部分が焼失。嵐雪の其角画像や其角所用の十徳・剣・脇差・硯, 芭蕉筆の巻物など焼失している。
	88	小菅孝次郎	15	※袋物商の「是真堂丸孝」(十軒店)。
	89	松澤八右衛門	4	薬屋 ※「㊦ 銀座」
	90	大谷儀兵衛	3	山谷の川魚料理屋「鮒儀」
	91	藤森勝三郎	1	すきやきの老舗「今朝」の二代目か。

	92	中澤彦七	1	ぬ利彦 酒醬油仲買商
	93	服部長兵衛	8	日本橋魚問屋
	94	服部喜兵衛	23	日本橋馬喰町の有名軽焼屋・「淡島屋」
	95	後藤家監督	6	「舊幕府呉服師」
	96	新喜楽	2	築地の料亭
	97	濱町常盤	1	料亭か
	98	佃や古田庄助	5	
	99	魚がし駒作	1	
	100	芳町みよしや	3	
	101	糸半高木健治	7	
	102	米倉嘉兵衛	1	日本橋の毛織物商人。
町・仲間	103	佐久間町総代金井徳右衛門	1	
	104	馬喰町誠誼會	2	
	105	日本橋魚河岸事務所	1	
	106	御防講	4	職人の親方層を中心とした神田明神の警護団体
遊郭か	107	仲之町近半	4	吉原
	108	仲之町青柳	3	吉原
	109	仲之町大忠	3	吉原
	110	稲本楼	2	吉原
	111	角海老楼	1	吉原
	112	新尾張屋	1	吉原
	113	仲之町松寿	3	吉原
	114	仲之町竹治	23	吉原
	115	大文字楼	5	吉原
	116	花武蔵	2	四谷の遊女屋か(永井荷風『断腸亭日乗』)。
	117	新福本	4	(推定)
	118	鈴岩田屋金龍	2	(推定)
	119	初音屋	6	(推定)
	120	藤屋	3	(推定)
	121	加賀屋	2	(推定)
	122	岩大坂屋	3	(推定)
	123	鶴藤屋	3	(推定)
	124	清岩泉	1	(推定)
	125	中武蔵照子	4	(推定)
	126	福中武蔵君枝	3	(推定)
	127	梅三升屋	12	(推定)
	128	吉堺屋	4	(推定)
	129	福吉	5	(推定)
資料保存機関	130	南葵文庫	3	
	131	教育博物館	1	現国立科学博物館か。
その他	132	多田正雄	6	通信省(『官報』485, 1914年3月)か。
	133	飯田久太郎	2	海軍主計中監か。
	134	中村喜一郎	1	染色技術者, 農商務省技師か。
	135	樋畑雪湖	7	逓信省に勤め, 逓信博物館を創立。松代出身。
	136	大田南岳	8	文化人(画家, 俳人 大田南畝の孫) 永井荷風の知人。
	137	黒須廣吉	7	大観会・観山会の幹事。
不明	138	田川	2	
	139	蜂龍	2	
	140	片山正幡	8	
	141	大原勘一	2	
	142	田中半七郎	3	
	143	矢島達介	8	
	144	田邊繁太郎	1	

145	齋藤善夫	3	
146	金山辰三	6	
147	吉橋文四郎	2	
148	若井しま	4	
149	千代川	9	
150	榎本育三	1	
151	野々山橋雄	4	
152	丹羽鉄次郎	1	
153	福松葉八重子	1	
154	松葉家お稻	4	
155	若松	3	
156	小野なつ	13	
157	藤松田中	3	
158	清水治右衛門	1	
159	亀井まき	1	
160	春本	4	
161	梅原助次郎	1	
162	磐瀬	6	
163	吉野義邦	3	
164	廣瀬美邦	1	
165	村田幸言	10	
166	榎本生幸	9	
167	田中勤之助	4	
168	伊藤やま子	3	
169	渡邊大助	5	
170	長谷川幸次郎	2	
171	秋山	1	
172	中井八十	5	
173	熊井福	2	
174	中山半兵衛	6	
175	佐藤雨馨	1	
176	上田浅吉	5	
177	勝見與吉	4	
178	川上由太郎	2	
179	野中都峯	28	
180	堀	4	
181	手島醇	2	
182	女子木之花会	1	
183	頼重松	2	
184	林群丈	1	
	184人	964	

※は、関東大震災後の美術品被害の調査「罹災美術品目録」（『日本書誌学大系 45（5） 相見香雨集 五』 青裳堂書店、1998年）の記述による。

付表2 江戸趣味展覧会出品リスト

種別	番号	所蔵者	資料名	数量	
徳川家・幕府関係(絵画)	659	藤森勝三郎	馬之圖 内府綱吉公筆	1幅	
	700	田村成義	五代將軍綱吉公橋上唐人の図	1幅	
	311	坪谷善四郎	徳川家・幕府家代々御印譜	1折	
	508	多田正雄	徳川家・幕府大奥使用源氏合	1組	
	204	淡島寒月	文化頃大奥より拝領婦人帷子	1枚	
	895	山中笑	八代將軍吉宗公鷹野の足袋	1足	
	896	山中笑	同上(八代將軍吉宗公鷹野の)草履	1足	
	310	坪谷善四郎	徳川家・幕府家御用船絵巻	1点	
	400	丹羽鉄次郎	綱吉公戯筆	1幅	
	122	前田侯爵家	徳川家・幕府綱吉より前田綱紀に賜りし香木	1個	
	521	亀井まき	十一代將軍家齊公画 寿老人図	1幅	
	701	田村成義	十一代將軍家齊公御作 黒楽寿銘茶碗	1個	
	690	塚原澁柿園	東照公御遺訓	1幅	
	699	田村成義	東照公御目録	1幅	
	226	吉田永光	小普請方持場絵図	1枚	
	909	上村蛙水	江戸御城内御間席	1枚	
	910	上村蛙水	同(江戸)御城内御間席之図	1枚	
	229	吉田永光	聖堂御再建の御普請の絵図	1枚	
	230	吉田永光	大奥座敷の絵図	1枚	
	176	澤京治郎	御朱印船印旗の軸	1幅	
	染織・染色関係	1	青山子爵家	襦袢(地白本紋縮子留袖松藤総模様)	1枚
		2	青山子爵家	襦袢(地紅追本紋縮子留袖翠簾梅藤桐の枝総模様)	1枚
		3	青山子爵家	襦袢(上本紫下絵皮茶暮霞山繭縮緬留袖虫螢総模様)	1枚
4		青山子爵家	襦袢(緑茶縮緬留袖安宅八島砧謡の心総模様)	1枚	
5		青山子爵家	襦袢(本紫縮緬留袖岩に瀧牡丹獅子扇藤流水中模様)	1枚	
6		青山子爵家	襦袢(紫山繭縮緬留袖蝶に秋草中模様)	1枚	
7		青山子爵家	襦袢(檜皮茶縮緬留袖櫻唐松牡丹翠藤流水中模様)	1枚	
8		青山子爵家	襦袢(同<檜皮茶縮緬留袖>・霞紅葉松蔦家瀧楯腰模様)	1枚	
9		青山子爵家	小袖(菅柳色繭縮緬裾藤鼠暮霞合留袖岩に瀧模様)	1枚	
10		青山子爵家	小袖(濃紫縫取山繭縮緬留袖翠簾葉玉高裾模様)	1枚	
11		青山子爵家	小袖(藍鼠色山繭縮緬岩に瀧松竹櫻牡丹中模様白重付)	1枚	
12		青山子爵家	袷(葡萄鼠縮緬裾暮霞水杜若裾模様)	1枚	
13		青山子爵家	袷(緋夫紋縮子)	1枚	
14		青山子爵家	掛下(緋山繭縮緬)	1枚	
15		青山子爵家	掛下(萌黄縮子岩に瀧牡丹獅子縫模様)	1枚	
16		青山子爵家	掛下帯(地白縮本辻留袖雲に翠簾藤総模様)	1枚	
17		青山子爵家	帷子(地白晒茶屋辻留袖菊慈童総模様)	1枚	
18		青山子爵家	帷子(地白縮子留袖紗綾形葵牡丹菊水仙総模様)	1枚	
19		青山子爵家	単(地■鼠縮緬留袖櫻菫蒲公英水に蘆総模様)	1枚	
20		青山子爵家	単(地裏柳越後縮留袖松櫻蔦家稲村中模様)	1枚	
21		青山子爵家	帷子(地深川鼠越後縮留袖霞岩山松櫻殿橋鷄中模様)	1枚	
22		青山子爵家	帷子(地花色縮留袖近江八景裾模様)	1枚	
23		青山子爵家	帷子(地褐布裏赤絹散寶盡総模様)	1枚	
24		青山子爵家	腰巻(赤地綾織)		
25		青山子爵家	附帯		
67		蜂須賀侯爵家	白綾波立杵葵紋陣羽織		
68		蜂須賀侯爵家	白羅紗萬字紋雲龍縫陣羽織		
69		蜂須賀侯爵家	白革扇散ジ狩着物		
70		蜂須賀侯爵家	紫革松に蔦狩着物		
71		蜂須賀侯爵家	赤色緞子牡丹狩着物		
72		蜂須賀侯爵家	白革孔雀狩羽織		
73		蜂須賀侯爵家	黄革蝶鳥狩着物		
74	蜂須賀侯爵家	黄革竹に省狩羽織			

75	蜂須賀侯爵家	白革葉玉狩羽織	
76	蜂須賀侯爵家	白革梅裁付袴	
77	蜂須賀侯爵家	赤地精好蝶袴	
78	蜂須賀侯爵家	花色革柿の木裁付袴	
79	蜂須賀侯爵家	白綾地紅葉縫袴	
80	蜂須賀侯爵家	赤縹子竹袴袴	
81	蜂須賀侯爵家	萌黄地緞子直垂上下	
82	蜂須賀侯爵家	赤緞子亀甲葵筒袖	
83	蜂須賀侯爵家	赤地錦櫻騎射小手	
84	蜂須賀侯爵家	綴錦雲鶴牡丹文様騎射小手	
85	蜂須賀侯爵家	黒天鷲絨花の丸騎射小手	
86	松平慈貞院	白地幸菱杏葉御紋散らし浮紋	1枚
87	松平慈貞院	白練	1枚
88	松平慈貞院	耕地幸菱杏葉御紋散らし浮紋	1枚
89	松平慈貞院	緋練	1枚
90	松平慈貞院	白綾子 立木縫模様	1枚
91	松平慈貞院	絹衣	1枚
92	松平慈貞院	白綾子地桂 亀甲に花折枝縫模様	1枚
93	松平慈貞院	緋縮緬波に菊縫模様	1枚
94	松平慈貞院	緋縹子 羽団扇花折枝縫模様	1枚
95	松平慈貞院	白大紋綾子花筏縫模様	1枚
96	松平慈貞院	萌黄紋縮緬 松に蔦雪素縫模様	1枚
97	松平慈貞院	浅黄紋(竹に葵) 縮緬住吉の素縫模様	1枚
98	松平慈貞院	萌黄縹麻付松に花縫模様	1枚
99	松平慈貞院	浅黄紋(竹に葵) 縮緬住吉の素縫模様	1枚
100	松平慈貞院	萌黄縹麻付松に花縫模(様)	1枚
124	阿部伯爵家	御拝領羅紗陣羽織	1個
133	細川侯爵家	御外套白羅紗 九曜御紋付	1着
134	細川侯爵家	黄羅紗 同上(九曜御紋付)	1着
135	細川侯爵家	羅紗御腰巻	2枚
136	細川侯爵家	黄羅紗御胸当	3枚
138	細川侯爵家	革足袋	1足
139	細川侯爵家	白足袋	1足
140	細川侯爵家	股立取	1包
141	細川侯爵家	御提手拭	1包
211	小菅孝次郎	賓曆頃生絹地市松模様御船印	1張
212	小菅孝次郎	麻地あられ小紋鷹匠股引	1枚
542	竹内久一	人形着物	1枚
556	春本	古代更紗敷物	1枚
557	春本	紺献上博多丸帯	1筋
558	春本	古代更紗に黒朱子の合帯	1筋
559	春本	唐棧二枚袴	1組
933	仲之町竹治	紅縮緬櫻模様 肌付襦袢	1枚
934	仲之町竹治	同(紅縮緬櫻模様) 牡丹に蝶模様	1枚
935	仲之町竹治	同(紅縮緬櫻模様) 牡丹に霞模様	2枚
936	仲之町竹治	奉書袖着付	3枚
937	仲之町竹治	鹿子・赤・紫・浅黄	3枚
938	仲之町竹治	白縮緬 金太郎肌抜	1枚
939	仲之町竹治	同(白縮緬) 牡丹模様肌抜	1枚
940	仲之町竹治	同(白縮緬) 孔雀模様	1枚
941	仲之町竹治	同(白縮緬) 奴風模様肌抜	1枚
942	仲之町竹治	同(白縮緬) 宝づくし模様	1枚
943	仲之町竹治	紅縮緬 吉原丸の首抜	1枚
944	仲之町竹治	友仙縮緬 肌抜襦袢	2枚

945	仲之町竹治	色襦子 着付	1枚
946	仲之町竹治	紅五郎 陣羽織	1枚
947	仲之町竹治	縞襦子 立付	1枚
949	仲之町竹治	博多 男帯	1本
950	仲之町竹治	鹿子・浅黄・紅襦袢	2枚
951	仲之町竹治	柿色三尺	3本
953	仲之町竹治	豆絞手拭	1本
560	初音屋	紅縮緬羽衣模様台付 肌抜襦袢	1枚
561	初音屋	白縮緬牡丹模様台付 同(肌抜襦袢)	1枚
562	初音屋	浅黄縮緬鯉瀧上り 同(肌抜襦袢)	1枚
563	初音屋	紅地平網縮緬半襦袢	1枚
564	初音屋	絞鹿の子三枚襦袢	2枚
566	藤屋	紅縮緬牡丹模様台付襦袢	1枚
567	藤屋	鹿子絞三枚襦袢	1組
568	藤屋	紅縮緬牡丹模様台付婦絆	1枚
569	加賀屋	鹿之子襦袢	3枚
570	加賀屋	奉書着附	1枚
571	岩大坂屋	紅縮緬牡丹模様台付襦袢	1枚
572	岩大坂屋	鹿之子三枚襦袢	1枚
573	岩大坂屋	紅縮緬牡丹台付襦袢	1枚
574	鶴藤屋	紅縮緬牡丹模様台付襦袢	1枚
575	鶴藤屋	紅鹿子三枚襦袢	1枚
576	鶴藤屋	友禪縮緬鳳凰模様襦袢	1枚
577	清岩泉	紅縮緬二十四孝狐火の模様	1枚
578	中武藏照子	紺地纏模様襦袢	1枚
579	中武藏照子	白縮緬同(纏) 模様	1枚
580	中武藏照子	紅縮緬同(纏) 模様	1枚
581	中武藏照子	浅黄縮緬同(纏) 模様	1枚
582	福中武藏君枝	紅縮緬富士山に霞模様襦袢	1枚
583	福中武藏君枝	白縮緬松に羽衣模様同(襦袢)	1枚
584	福中武藏君枝	浅黄縮緬雲に龍模様同(襦袢)	1枚
585	梅三升屋	白縮緬鳶模様襦袢	1枚
586	梅三升屋	浅黄疋田縮緬纏模様同(襦袢)	1枚
587	梅三升屋	褪紅色疋田鳶模様同(襦袢)	1枚
588	梅三升屋	白縮緬牡丹墨絵模様同(襦袢)	1枚
589	梅三升屋	羽二重着付	1枚
590	梅三升屋	友禪縮緬半襦袢	1枚
591	梅三升屋	奉書袖着付	1枚
592	梅三升屋	縞朱子立付	1枚
593	梅三升屋	茶献上帯	1本
594	梅三升屋	盲目縞腹掛と足袋	1組
595	梅三升屋	柿色三尺帯	1本
596	梅三升屋	火之用心提物	1点
597	吉堺屋	紅縮緬羽衣台付	1枚
598	吉堺屋	鹿之子三枚襦袢	1枚
599	吉堺屋	奉書着付	1枚
600	吉堺屋	縞朱子立付	1枚
601	福吉	紅縮緬飛龍台付襦袢	1枚
602	福吉	同(紅縮緬) 羽衣襦袢	1枚
603	福吉	白縮緬牡丹台付	1枚
604	福吉	鹿之子三枚襦袢	1枚
605	福吉	友禪縮緬半襦袢	2枚
614	仲之町松寿	縮緬襦袢	3枚
615	仲之町松寿	縞朱子袴	1着

616	仲之町松寿	羽二重半纏	1枚
624	宝井善次郎	刺子	1枚
627	宝井善次郎	衣類	3枚
681	榎本生幸	紹の模様物	1枚
696	田中勤之助	肩衣 越後屋包紙付	1組
706	鈴岩田屋金龍	紅縮緬牡丹唐獅子 肌抜襦袢	1枚
707	鈴岩田屋金龍	鹿の子絞り 肌抜襦袢	3枚
716	長谷川幸次郎	紙子羽織	1枚
717	長谷川幸次郎	同(紙子) 着物	1枚
730	中井八十	紙子衣服 だるま模様 裏紅鹽瀬金刷 寿の字散し	1枚
762	中山半兵衛	唐棧袴	1着
763	中山半兵衛	黒袖羽織	1枚
764	中山半兵衛	印半纏浅黄色	1枚
769	佐藤雨馨	更紗敷物	1枚
770	佐藤雨馨	紫毛氈	1枚
859	田頭凱夫	白明石地模様襲付	1重
860	田頭凱夫	褐色麻総模様	1枚
861	田頭凱夫	白麻総模様	1枚
862	田頭凱夫	黒縮緬総模様	1枚
863	田頭凱夫	綸子総模様	1枚
864	服部喜兵衛	鉄皮色地羽二重橘の友仙染画羽織	1枚
865	服部喜兵衛	白木紋綸子桐紋貝合縫小袖	1枚
866	服部喜兵衛	花色縹子網目箔押麥に鶉小袖	1枚
867	服部喜兵衛	萌黄羽二重藤巴紋付白抜草模様単衣	1枚
868	服部喜兵衛	更紗縮緬引とき	1枚
869	服部喜兵衛	浅黄地鼈甲に橘模様夜着引とき	1枚
870	服部喜兵衛	萌黄縮緬鳳凰模様夜着引とき	1枚
871	服部喜兵衛	御納戸地縮緬竹に鶴模様引とき	1枚
872	服部喜兵衛	萌黄縮緬紗綾形に牡丹模様夜着引とき	1枚
873	服部喜兵衛	紅本紋綸子惣絞小袖	1枚
874	服部喜兵衛	白綸子松竹梅鶴絵模様	1枚
875	服部喜兵衛	御納戸縮緬雪持の蘭総模様小袖	1枚
876	服部喜兵衛	緋縮緬波に梅葵の総模様小袖	1枚
877	服部喜兵衛	花色本紋縹子絞唐草鳳凰縫腰模様小袖	1枚
878	服部喜兵衛	萌黄綾水に貝総縫模様引とき	1枚
879	服部喜兵衛	白地紋綸子納戸鶴に鼈甲絞り引とき	1枚
880	服部喜兵衛	花色縮緬竹に茨総模様引とき	1枚
881	服部喜兵衛	白地縮緬紫ほかし菊楓花菱縫模様引とき	1枚
882	服部喜兵衛	萌黄縮緬干網に松藤の腰模様小袖	1枚
883	服部喜兵衛	花色縹子桐に鳳凰総縫模様打掛	1枚
884	服部喜兵衛	藍鐵色縹子霞に雲鳥総模様打掛	1枚
885	服部喜兵衛	紫根地雲鶴唐織下帯	1筋
886	服部喜兵衛	紫地牡丹唐草掛下帯	1筋
964	芳町みよしや	鹿子絞 襦袢	2枚
965	芳町みよしや	白縮緬牡丹の縫模様	1枚
966	芳町みよしや	かくれ蓑縫模様 肌抜	1枚
978	三越呉服店	裌襦 縫模様	1枚
149	田川	肌着 肉襦袢	1枚
186	石川銀治郎	藍萬筋仙台平袴	1点
187	石川銀治郎	唐棧平袴 黒八丈裏	1点
188	石川銀治郎	小紋堅紹の羽織 丸に片波見紋	1枚
189	石川銀治郎	小紋龍門肩衣 同(丸に片波見紋)	2枚
198	石川銀治郎	羽織紐	1本
213	小菅孝次郎	麻地小紋鷹狩袴	1着

214	小菅孝次郎	縞木綿廻し合羽	1枚
244	江澤菜魚	刺子	2枚
245	江澤菜魚	麻台付羽織(丸に鷹羽)	2枚
265	神谷鶴伴	柳簀古裂帳	1冊
279	大西いせ万	纏ちらし羽織裏地	1枚
303	樋畑雪湖	長袴	1着
321	川尻清潭	麻地摸糠重着物	1組
342	服部長兵衛	古渡唐棧羽織	1枚
343	服部長兵衛	同(古渡唐棧)着物	2枚
344	服部長兵衛	同(古渡唐棧)下着	1枚
345	服部長兵衛	同(古渡唐棧)単物	1枚
346	服部長兵衛	袖無羽織	1枚
348	市場徳兵衛	唐棧裂地貼付額	1面
349	市場徳兵衛	同(唐棧)羽織	1枚
350	市場徳兵衛	同(唐棧)着物	1枚
354	熊谷大次郎	百福浴衣(大山詣の揃へ)	1枚
355	熊谷大次郎	革羽織	1枚
357	熊谷大次郎	縮緬刺足袋	半足
358	熊谷大次郎	唐縫取羽織	1枚
360	熊谷大次郎	竹屋町夏掛物	1軸
363	熊谷大次郎	鮫小紋袴	1着
364	熊谷大次郎	腰下天笠	1個
365	吉橋文四郎	木綿刺子	1枚
366	吉橋文四郎	縮緬刺子	1枚
369	永峰	木彫狐の額	1面
370	木内省古	唐棧の袴	1着
371	木内省古	龍門肩衣	1枚
372	木内省古	麻袴	1着
401	福松葉八重子	下村観山筆 白縮緬肌抜襦袢	1枚
402	松葉家お稻	羽折裏地書画模様	4枚
403	松葉家お稻	縮緬大字崩し	1枚
404	松葉家お稻	木綿浅黄地下着	1枚
405	松葉家お稻	八端地三尺帯	1本
450	稻本楼(吉原)	白縮緬牡丹に蝶台付 肌付襦袢	4枚
451	稻本楼(吉原)	紫縮緬養老の瀧 肌抜襦袢	1枚
452	稻本楼(吉原)	紅縮緬 肌抜	3枚
453	稻本楼(吉原)	絞り鹿子肌襦袢	4枚
467	小野なつ	奉書紬着付(吉原つなぎ模様)	1枚
468	小野なつ	紅縮緬牡丹に霞模様肌付	1枚
469	小野なつ	白縮緬纏づくし肌抜襦袢	1枚
470	小野なつ	浅黄地紫紅鹿子肌抜襦袢	3枚
471	小野なつ	御納戸博多献上帯	1本
472	小野なつ	紺木綿の腹掛	1枚
473	小野なつ	紺足袋	1足
474	小野なつ	縞朱子立付	1点
475	小野なつ	算盤玉の三尺帯	1本
476	小野なつ	豆絞りの手拭	1本
480	花武蔵	紅縮緬肌付襦袢石橋模様	1枚
481	花武蔵	友禅縮緬襦袢二枚付	2組
495	細田安平	唐棧カピタン下着袴	1組
101	松平慈貞院	白地幸菱杏葉絞散らし	1筋
102	松平慈貞院	緋同上(幸菱杏葉絞散らし)	1筋
103	松平慈貞院	紫天鷲絨 牡丹に霜除縫模様	1筋
104	松平慈貞院	浅黄天鷲絨蝶に菊縫模様	1筋

	105	松平慈貞院	緋山繭腰帯波に千鳥碇縫模様	1 筋
	416	野口彦兵衛	模様衣裳張込二枚折屏風	1 双
	252	糸半高木健治	本金銀糸見本	1 箱
	758	熊井福	御柄糸色本	1 箱
装身具	109	松平慈貞院	箱瀬古花の縫模様(七つ道具付)	1 個
	110	松平慈貞院	同上(箱瀬古) 鷹に松の縫模様(七つ道具付)	1 個
	111	松平慈貞院	鏡付・一個 内藤簪二本・王簪一本・菊簪一本・鼈甲簪一本・胴メ一個	
	112	松平慈貞院	蕨入 綴れ錦	1 個
	113	松平慈貞院	煙管入 同上(綴れ錦)	1 側
	114	松平慈貞院	銀に七宝の象眼煙管	1 個
	115	松平慈貞院	蕨入 菊の縫	1 個
	116	松平慈貞院	銀に龍の彫煙管	1 個
	117	松平慈貞院	銀紙挾牡丹に蝶	1 個
	118	松平慈貞院	吹上の手鞠	4 個
	119	松平慈貞院	袱紗牡丹に唐獅子縫模様	1 枚
	120	松平慈貞院	同(袱紗) 浜御殿縫模様	1 枚
	147	西澤笛畝	江戸煙管 九本貼ませ	1 点
	148	田川	紙入	2 点
	195	石川銀治郎	箱せこ	1 個
	196	石川銀治郎	袂落し	1 枚
	197	石川銀治郎	印籠	1 個
	201	淡島寒月	天明時代懐中用具	3 点
	203	淡島寒月	寛政頃深川芸者用かんざし	1 本
	205	淡島寒月	文化頃男女用袂落し	1 個
	206	淡島寒月	文化頃花帽子留	2 個
	217	小菅孝次郎	羊遊齋写蒔絵櫛笄	9 点
	221	小菅孝次郎	紹刺子紙入	1 個
	225	小菅孝次郎	銀鎖付掛守	1 枚
	246	糸半高木健治	本縮丸糸経 紅葉狩図帛紗	1 枚
	247	糸半高木健治	黒七子五紹裏 賓來山縫帛紗	1 枚
	274	大谷儀兵衛	鐵杖 銘鈴虫	1 巻
	284	田邊繁太郎	江戸時代蒔絵配り重帛紗付	1 組
	306	齋藤善夫	はこせこ	1 個
	325	川尻清潭	古代帛紗	2 枚
	361	熊谷大次郎	無地菖蒲革紙入	1 個
	373	木内省古	紙入	1 個
	386	千代川	腕守	2 個
	388	千代川	衿留	1 個
	389	千代川	紙入	2 点
	390	千代川	煙草入	1 個
	391	千代川	文挟み	2 個
	392	千代川	御守札	1 点
	393	千代川	袂落し	1 個
	411	柴田常恵	黒船織出模様紙入	1 個
429	角海老楼	綴織襦袢	1 着	
477	小野なつ	天鷲絨の掛守	1 点	
478	小野なつ	扇子	1 本	
479	小野なつ	三枚底の鞋	1 足	
540	竹内久一	手袋用掛	1 組	
644	飯川榮太郎	刀鏢	1 個	
663	村田幸言	紙入	7 個	
664	村田幸言	箱せこ	3 個	
665	村田幸言	巾着	5 点	
666	村田幸言	短冊ばさみ	1 点	

	667	村田幸言	蓑入	5点
	668	村田幸言	同(蓑入) 一つさげ	7点
	669	村田幸言	しをり	5点
	670	村田幸言	奥女中蓑入	2組
	671	村田幸言	袂落	2組
	683	榎本生幸	守袋	1個
	684	榎本生幸	蓑入	1組
	686	榎本生幸	簪	3本
	688	榎本生幸	袋	1個
	691	塚原澁柿園	鏝 熊谷義次作	1点
	721	尾形月三	櫛	9個
	722	尾形月三	紙入	2個
	726	尾形月三	掛守	1個
	732	中井八十	竹 きせる筒	1本
	754	武内桂舟	象牙根付 谷斎彫	1個
	761	中山半兵衛	紙入	2個
	778	尾形月耕	印籠	1個
	779	尾形月耕	紙入留	1個
	780	尾形月耕	女持 煙管	1個
	781	尾形月耕	女物 煙草入	1個
	782	尾形月耕	紙入	1個
	792	尾形月耕	陣笠	1個
	794	廣瀬辰五郎	頭巾	5着
	797	廣瀬辰五郎	腕守	1個
	803	上田淺吉	菖蒲皮腰下	1個
	804	上田淺吉	朱羅紗はこせこ	1個
	807	勝見與吉	蓑入白玉根付	1個
	808	勝見與吉	金革蓑入柴山根付	1個
	809	勝見與吉	種ヶ島根付	1個
	813	川上由太郎	銀製虫尽し彫刻煙管	1本
	814	川上由太郎	同(銀製) 唐草彫付金消し煙管	1本
	815	野中都峯	櫛筭(象牙製珪染千鳥の蒔絵) 文政頃	1組
	816	野中都峯	櫛九枚 筭六本 簪七本 黒塗箱三	1箱
	820	野中都峯	女持煙管入文化頃	1本
	824	野中都峯	慶長年間の接煙管	1本
	825	野中都峯	同(慶長年間) 煙管雁首「水口吉久」銘あり	1本
	826	野中都峯	町奴使用甲煙管	1本
	857	田頭凱夫	頭飾品一揃	1箱
	858	田頭凱夫	煙草入	6個
	927	児童用品研究会	紙入	3点
	931	手島醇	紙入	2個
	948	仲之町竹治	扇子	3本
	976	三越呉服店	櫛	80本
	977	三越呉服店	簪と筭	90本
調度	26	青山子爵家	厨子棚(亀甲地紋若橘蒔絵)	
	27	青山子爵家	黒棚(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
	28	青山子爵家	書棚(若松竹蒔絵)	
	29	青山子爵家	文台(亀甲地紋若橘蒔絵)	
	30	青山子爵家	料紙・硯箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
	31	青山子爵家	短冊箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
	32	青山子爵家	色紙箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
	33	青山子爵家	大文箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
	34	青山子爵家	小文箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
	35	青山子爵家	水引箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
	36	青山子爵家	昆布箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	

37	青山子爵家	赤箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
38	青山子爵家	小角赤箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
39	青山子爵家	払箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
40	青山子爵家	晝紙箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
41	青山子爵家	十二手箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>) 内入 小箱十・三つ揃櫛八組・鏡家鏡共各二つ	
42	青山子爵家	元結箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
43	青山子爵家	渡金箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>) 内入 銀渡金	
44	青山子爵家	鐵漿箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>) 内入 香箱銀沸一・銀鐵漿入一・鐵漿筆一	
45	青山子爵家	眉作箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>) 内入 三つ揃櫛二組・眉作三・眉刷大小八本・眉作筆大小五組・白粉入・おこね入一・晝紙五	
46	青山子爵家	沉箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>) 内入 掛箱内入小箱六つ	
47	青山子爵家	炭團箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
48	青山子爵家	火取香炉(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
49	青山子爵家	匂箱(同<亀甲地紋若橘蒔絵>) 内入 手提香盆・平香炉・長香炉一封・丸重香合一封・香匙建二・鐵丸香箸一・銀灰押一・銀香匙二・鎮火合一・銀丸葉挾二・銀針二・銀六角香箸一・銀灰押一	
50	青山子爵家	香盆(同<亀甲地紋若橘蒔絵>) 内入 長香炉	
51	青山子爵家	碁盤(同<亀甲地紋若橘蒔絵>) 碁笥共	
52	青山子爵家	将棋盤(同<亀甲地紋若橘蒔絵>) 駒箱共	
53	青山子爵家	膳部掛盤(村梨地若松折枝蒔絵) 五組・内入 一の膳・二の膳・三の膳・七つ組椀五組・汁椀八個・平皿五個・坪大小十・猪口五個・腰高三十五・盃五個・吸物椀七個・後段椀十八・箸五・茶台三個・縁高五個・湯桶五個・水次五個・飯鉢五個・板子五個	
54	青山子爵家	盥(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
55	青山子爵家	耳盥(同<亀甲地紋若橘蒔絵>) 内入 嗽椀・同台	
56	青山子爵家	湯桶(同<亀甲地紋若橘蒔絵>)	
106	松平慈貞院	梨地梅蒔絵香道具	1組
108	松平慈貞院	梨地提重梅蒔絵	1組
192	石川銀治郎	鐵製銚子 玉彫付の蓋	1個
193	石川銀治郎	青楽焼の角鉢	1個
199	大原勘一様	唐獅子置物	1個
216	小菅孝次郎	元禄頃刻煙草箱	1個
233	黒須廣吉	元禄饅頭篋	1箱
234	黒須廣吉	鐵鉢 香以山人所用暁雲齋蒔絵	1個
235	黒須廣吉	煙草盆	1個
237	黒須廣吉	火鉢	1個
264	神谷鶴伴	童子格子蒔絵硯箱	1個
304	樋畑雪湖	壮机	1脚
308	齋藤善夫	御細工物 箸入	3個
323	川尻清潭	水引掛蒔絵の重箱(市川海老藏所有)	1筥
324	川尻清潭	古手炉	3種
328	川尻清潭	蒔絵十色盃	10個
352	市場徳兵衛	角力起顯	4冊
353	市場徳兵衛	通笑戯著	1冊
359	熊谷大次郎	酒瓶	1個
383	瀬戸錫之助	大盃 蒔絵入	2個
417	仲之町近半	元禄頃重箱棚	1個
418	仲之町近半	香枕(伝高尾所用)	1個
419	仲之町近半	香箱	1点
420	仲之町近半	古代盃と杯台	1組
427	稻本楼(吉原)	古式黒塗大箆筥(小稻使用) ※写真 11	1棹

	490	吉浦祐二	馬琴所用陶製の枕	1点
	500	水谷幻花	肱突 京伝所用	1個
	545	栗原かなめや	濃紫書 盆	1枚
	552	栗原かなめや	鏡外箱(大高子葉の文字を象嵌せり)	1個
	553	栗原かなめや	元禄頃四組重箱	1個
	554	栗原かなめや	江戸時代手箱	1個
	565	初音屋	文籠	1個
	612	久保田米三	蜀山文字入柄鏡	1個
	619	市川宗家	同上(大口屋暁雨) 使用德利	1個
	628	宝井善次郎	薬箱	1個
	629	宝井善次郎	硯	1個
	630	宝井善次郎	茶碗	4個
	645	飯川榮太郎	提菴盆	1個
	646	飯川榮太郎	盃台 盃二個付	1組
	655	吉野義邦	蒔絵螺鈿 江戸の三木・國貞筆	3枚
	687	榎本生幸	木箱模様付	2個
	711	渡邊大助	盆	1組
	712	渡邊大助	松竹梅 蒔絵の盆 抱一筆	1組
	714	渡邊大助	菓子鉢	1個
	719	尾形月三	盃類	9個
	720	尾形月三	唐木彫香枕	1個
	733	中井八十	矢立	3本
	734	中井八十	瓢模様見台 泰眞筆	1台
	752	武内桂舟	田楽の御重箱	1組
	753	武内桂舟	油壺	1個
	767	佐藤雨馨	蒔絵の小箱	1箱
	771	佐藤雨馨	見台	1個
	787	尾形月耕	鐵骨行燈	1個
	789	尾形月耕	燈台	1個
	790	尾形月耕	烏籠	1個
	793	尾形月耕	陶器碗	1個
	802	上田淺吉	紫檀菴盆	1個
	812	常岡常盤津家元	五十三次絵の茶碗	1個
	817	野中都峯	型附古伊萬里油壺色絵	1個
	818	野中都峯	古伊萬里色絵八角油壺	1個
	819	野中都峯	京焼色絵油壺	1個
	821	野中都峯	紅板楓鹿の蒔絵	1個
	829	野中都峯	江戸名題八代昌孝作火燈	1個
	854	巖谷小波	三春駒 香炉 平賀鳩溪作	1個
	856	巖谷小波	陶製水入	1個
	887	豊泉益三	懷中鏡	10点
	888	豊泉益三	香枕	1個
	974	三越呉服店	越後屋時代茶釜	1個
	975	三越呉服店	油壺	24点
調度(人形)	609	梅原助次郎	龍人<神カ>王人形(尺二寸)	1個
	658	廣瀬美邦	三月 古代江戸雛 葵紋金蒔絵掛盤及椀付	
	672	佐藤翠湖	江戸風俗人形	45個
	724	尾形月三	茶汲人形	1個
	952	仲之町竹治	木彫人形	3個
木像	222	小菅孝次郎	幡隨院長兵衛木像	1個
	224	小菅孝次郎	曲亭馬琴像	1枚
	238	黒須廣吉	俳諧三聖の像 三個	1組
木像ほか	454	加賀豊三郎	京伝 銅印 肖像 巻物三点	1箱
刀剣関係	267	清元市寿	山彦所用の刀	1振

	302	樋畑雪湖	殿中用小刀	1 腰
	438	大田南岳	刀	1 振
	439	大田南岳	短刀	1 振
	502	多田正雄	水心子正秀作脇差(文化文政頃江戸の鍛冶)	1 口
	625	宝井善次郎	刀	1 振
	626	宝井善次郎	劔	1 振
	759	中山半兵衛	黒塗の木刀 竹模様	1 振
楽器・楽器関係	270	新喜楽	三味線 銘都鳥	1 挺
	285	小泉迂外	河東節三味線 幸翁作銘松風	1 挺
	299	樋畑雪湖	阿波作太鼓胴 笹蒔絵	1 挺
	300	樋畑雪湖	梨地大鼓胴筥	1 個
	305	樋畑雪湖	太鼓皮及詞 寛政より文化頃使用	1 揃
	376	若井しま	三絃銘掉鹿 幸翁作八つ折	1 挺
	606	野崎廣太	河東節三味線(一銘孟東野・一小林幸栄作)	2 挺
	613	三井養之助	三味線(一銘倭音)	2 挺
	617	益田孝	三味線 銘松虫	1 挺
	698	杵屋勘五郎	三絃 銘響司	1 挺
	731	中井八十	三味線 銘くみ那	1 挺
	765	佐藤雨馨	三味線銘 鶴聲	1 挺
	766	佐藤雨馨	調子笛	1 個
	269	新喜楽	見台	1 点
	286	小泉迂外	河東節撥 文政時代連馬旧藏	1 個
	301	樋畑雪湖	大蔵流太鼓傳書	1 巻
	356	熊谷大次郎	友禅琴袋	1 枚
	362	熊谷大次郎	樺柄脇差 船田(琴小道具)	1 腰
	482	河東節秀翁	紫縮緬河東節幕(享保頃)	1 張
	709	伊藤やま子	紙子三味線の袋	1 枚
	811	常岡常盤津家元	梨地見台	1 台
	822	野中都峯	ビードロ張琴爪入葵蒔絵紋付爪添弘化頃	1 個
	823	野中都峯	元禄頃の三味線撥	1 個
	955	仲之町竹治	銅筥	1 個
玩具	107	松平慈貞院	犬張子 一封 内銀茶碗二個・大上郎二組・大上郎一組・小上郎三組・櫛三枚揃二組・剃刀二丁・白粉摺り一对・鍔毛抜一对・おこれずみ・きわ白白粉・眉作道具長短五本・絵元結二・小上郎七組・鐵漿筆一对	
	330	川尻清潭	玩具すばんぼ形菓子器	1 個
	755	武内桂舟	當物獨楽	1 個
	795	廣瀬辰五郎	眼鏡の玩具	1 個
	923	児童用品研究会	年中行事玩具	8 点
	968	林群丈	双六盤	2 組
道具	374	中澤彦七	江戸八天秤の一分銅付	1 点
	395	野々山橘雄	守護刀の袋	1 点
	396	野々山橘雄	守本尊の袋	1 点
	397	野々山橘雄	薙刀の覆	1 点
	541	竹内久一	道中人足手甲	1 個
	551	栗原かなめや	元禄のうどん箱	1 箱
	555	栗原かなめや	けんどん箱	1 箱
	685	榎本生幸	蚊帳釣り金具	1 個
	689	伊井蓉峰	けんどん箱	1 個
	723	尾形月三	菓子小箱	1 個
	725	尾形月三	提灯	1 個
	727	林若樹	煙草屋行商箱(釘屋簞笥として伝はりしものなれど実は誤りなり)	1 個
	756	武内桂舟	そば漉し	1 個
	785	尾形月耕	提灯	1 個

	788	尾形月耕	提行	1個
	791	尾形月耕	如露	1個
	912	山村耕花	菓子大蒸籠 和泉町虎屋	2個
	913	山村耕花	同(菓子大蒸籠) 松阪屋	2個
	914	山村耕花	通蒸籠(虎屋・萬年屋・鈴木越後・竹村伊勢・亀屋和泉)	5個
看板・暖簾・幟	202	淡島寒月	寛政年代軽焼家根看板	1枚
	271	白井正助	人參梅花香の幟	1点
	272	白井正助	同(人參梅花香) 看板	1枚
	273	白井正助	順氣消毒散看板	1枚
	679	松澤八右衛門	薬看板	1個
	796	廣瀬辰五郎	おこしの看板	1個
	954	仲之町竹治	暖簾	1張
	973	三越呉服店	越後屋時代看板	4枚
錢箱	191	石川銀治郎	木箱錢入	1個
	326	川尻清潭	天保度商家の錢箱	1個
	543	飯田久太郎	錢箱	1個
	544	飯田久太郎	錢桶	1個
	635	宝井善次郎	魚問屋の錢箱	1個
	828	野中都峯	江戸銀座使用千両箱江戸銀座の烙印あり	1箱
消防(染織)	57	青山子爵家	白羅紗火事羽織	
	58	青山子爵家	婦人用緋羅紗火事羽織踏込共	
	59	蜂須賀侯爵家	紫羅紗紋散シ火事頭巾	
	60	蜂須賀侯爵家	同(紫羅紗) 桐紋火事羽織胸掛共	
	61	蜂須賀侯爵家	黄羅紗萬字柏紋散シ火事頭巾	
	62	蜂須賀侯爵家	同(黄羅紗) 萬手放火事羽織胸掛共	
	63	蜂須賀侯爵家	萌黄羅紗 同夏火事羽織同	
	64	蜂須賀侯爵家	甲付白羅紗萬字紋火事頭巾・柏紋前立跨	
	65	蜂須賀侯爵家	黄羅紗葵紋火事羽織・胸掛共	
	66	蜂須賀侯爵家	白羅紗稻ノ丸紋火事初級・胸掛共	
	131	細川侯爵家	火事装束御紋付御甲頭巾	1着
	132	細川侯爵家	同(火事装束) 御紋付御陣笠	1点
	137	細川侯爵家	黄羅紗火事羽織	3着
	160	宮澤朱明	火事装束	1点
	367	永峰	火事用皮頭巾	1個
	387	千代川	火事装束	1組
	539	竹内久一	火事用頭巾	1個
消防	190	石川銀治郎	皮羽織	1枚
	200	大原勘一様	革羽織	1枚
	243	江澤菜魚	縞皮羽織	1枚
	327	川尻清潭	同(天保度商家の) 火事半纏	1枚
	334	金山辰三	皮半纏	2枚
	341	服部長兵衛	皮羽織	1枚
	253	田中半七郎	東京消防組写真	1枚
	379	御防講	金の纏	1本
	380	御防講	龍吐水	1組
	381	御防講	半纏	1点
	382	御防講	提灯竿付	1対
	499	水谷幻花	同(江戸時代) 消防消札	2枚
	538	竹内久一	纏扇子	1本
	676	松澤八右衛門	龍吐水 文久三年時代	1組
	682	榎本生幸	印半纏	1枚
教育	514	教育博物館	寺小屋所用品(硯・墨はさみ・双紙・芳國三枚続書初会・書初幅・手本・けいさん)	7点
	921	児童用品研究会	天神机	1点
絵画	121	龍岡町松平子爵家	大江戸之図(鋏形蕪斎筆) 六曲屏風	半双

123	前田侯爵家	前田齊泰婦封函簿の図	2 卷
127	秋元子爵家	朝鮮人來朝行列絵巻	3 卷
128	秋元子爵家	道中名所絵巻	5 巻
129	津軽伯爵家	絵巻物 英一蝶筆	2 卷
130	津軽伯爵家	子供遊絵巻	1 冊
142	細川侯爵家	行列絵巻	1 卷
143	西澤笛畝	江戸名所絵草々	
150	蜂龍	面冠人物の踊図	1 点
151	蜂龍	天王祭の図	1 幅
152	片山正幡	檜兜五月幟	1 幅
170	澤京治郎	当世名物鹿子富錦絵	1 枚
183	栗山善四郎	浅妻船之図 一蝶筆	1 幅
184	栗山善四郎	狩野素川大田蜀山合作松魚之図	1 幅
185	栗山善四郎	隅田川自画賛 抱一筆	1 幅
194	石川銀治郎	暫の図 国定(ママ) 筆	1 個
218	小菅孝次郎	文化吉原十二月張交屏風	半隻
231	吉田永光	忠臣藏絵巻物 三枚	1 組
232	黒須廣吉	恵美寿軸物	1 幅
236	黒須廣吉	上野戦争図 三枚	1 組
250	糸半高木健治	今様名所錦絵	1 班
257	矢島達介	東海地名所図絵	1 卷
266	濱町常盤	鋏形蕙齋筆 越後屋の図	1 幅
297	小泉迂外	津廻國名所図絵 天保十一年版	1 冊
313	川尻清潭	瀧に鯉の図 香以山人筆	1 幅
375	若井しま	抱一筆 掉鹿之画賛	1 幅
384	瀬戸錫之助	周山(*吉村周山) 筆 軸物	1 幅
399	丹羽鉄次郎	せきぞろの図	1 幅
406	大原鉦一郎	猿若町内彦酒店団扇画	1 幅
407	大原鉦一郎	国貞筆稚芸能画	1 幅
412	窪田勘六	栄之筆隅田川舟遊の図	1 幅
422	仲之町青柳	栄之画 蜀山賛幅	1 幅
424	仲之町大忠	其一筆 助六	1 幅
437	大田南岳	鳥文齋栄之筆 蜀山書像 蜀山自賛 狂歌 及詩 還暦の際知友に贈りしもの ※東京国立博物館に現存	1 幅
455	加賀豊三郎	同(京伝) 筆 婦人納涼	1 幅
457	加賀豊三郎	一九筆 猿まはし	1 幅
458	加賀豊三郎	京伝筆 大夫画 蜀山題	1 幅
460	加賀豊三郎	一九筆 安宅	1 幅
461	加賀豊三郎	一九筆 廻礼の図	1 幅
465	加賀豊三郎	菅公之図 大文字屋かぼちや画	1 幅
466	加賀豊三郎	同 貝之図	1 幅
491	益田英作	抱一筆 助六の図一対	3 幅
493	細田安平	元旦諸大名登城	1 幅
494	細田安平	傀儡師 師宣筆	1 幅
503	多田正雄	写本江戸八景	1 冊
507	多田正雄	源氏絵	5 枚
509	大文字楼	かぼちや宗園筆 桜花春草の図	1 幅
510	大文字楼	同(かぼちや宗園筆) 秋草小鳥の同	1 幅
511	大文字楼	鳥文齋栄之筆 花魁道中の図	1 幅
512	大文字楼	窪俊満筆	1 幅
513	大文字楼	谷文晁抱一合作筍図	1 幅
517	田畑千壺	江戸時代団扇画	12 枚
522	大槻如電	長谷川雪旦筆 日本橋図	1 幅
526	竹内久一	山陽堂哥名画	1 冊
546	栗原かなめや	神田明神の図 雪旦筆	1 幅

	549	栗原かなめや	天地丸御船の掛物	1幅
	550	栗原かなめや	鍾旭の掛物	1幅
	608	藤村喜七	蜀山栄之英山筆扇面書画幅	1幅
	620	市川宗家	麻衣泥舟図 英一蝶筆	1幅
	621	市川宗家	其角一蝶筆 書画幅	1幅
	622	川澄力蔵	待乳山 宮川長春筆	1幅
	637	磐瀬	浅草三社追儺神事 長命晏信筆	1幅
	638	磐瀬	愛宕毘沙門の御使 喜多武清筆	1幅
	639	磐瀬	浅妻船 加藤千蔭自画讃	1幅
	641	磐瀬	江戸名所櫻花扇(金泥画写生) 抱一筆	1本
	643	伊達忠七	江戸十二月絵巻物	1巻
	656	吉野義邦	江戸全景図 鋏形蕙齋筆 ※写真17	1枚
	657	吉野義邦	子供角力大童山 春英筆	1枚
	658	廣瀬美邦	江戸年中行事	1組
	658	廣瀬美邦	正月 羽子板 左義長	
	658	廣瀬美邦	二月 稲荷祭絵馬 口入稲荷の土偶	
	658	廣瀬美邦	四月 誕生佛 印度古渡	
	658	廣瀬美邦	五月 縮緬細工鍾馗 鍾馗掛物 歌川豊春一幅	
	658	廣瀬美邦	六月 八月新富士山開 麦藁籠	
	658	廣瀬美邦	七月 七夕祭の琴	
	658	廣瀬美邦	八月 深川八幡宮神天	
	658	廣瀬美邦	九月 芝神明祭千木箱	
	658	廣瀬美邦	十月 恵比寿講祭(木彫祭神)	
	658	廣瀬美邦	十一月 顔見せ人形	
	658	廣瀬美邦	十二月 お事始の筈 初代松本幸四郎似顔	
	661	川上邦基	元禄花見風俗画額	1個
	692	塚原澁柿園	塚原氏祖父肖像	1幅
	693	塚原澁柿園	蜀山人自画賛鱉の図	1幅
	704	田村成義	油坊主の園 多賀朝湖筆(※英一蝶)	1幅
	705	田村成義	風俗画 宮川長亀筆	1幅
	740	酒井好古堂	遊君百姿	2冊
	747	酒井好古堂	鋏形の江戸一覽	1枚
	748	酒井好古堂	のりやの包紙 北斎画	1枚
	749	酒井好古堂	豊国豊春筆 浮世絵	10枚
	777	尾形月耕	江戸櫻 鈴木春信筆	1冊
	806	上田浅吉	小供毛角力之図	1幅
	847	笹川臨風	京伝筆花魁画賛	1幅
	849	笹川臨風	抱一画賛	1軸
	889	豊泉益三	駿河町元旦の図	1幅
	899	篠田胡蝶	白牡丹の図 抱一筆	1幅
	903	堀	舊幕旗下陣羽織絵 扇子	1本
	904	上村蛙水	市川白猿筆 扇地紙	1枚
	905	上村蛙水	八代目団十郎図	1枚
	911	上村蛙水	御當家様常州小笠原御狩図	1枚
	916	佐野するがや	今戸天王堂之扇	1本
	926	児童用品研究会	京都年中行事稚遊	12枚
	928	金子範二	半折 紀文画賛	1幅
	929	米倉嘉兵衛	御祭之図 文晁抱一筆	1幅
	932	女子木之花会	遊戯之図 英一蝶筆	1幅
扁額	210	市川七作	江戸時代猿若町芝居写真額	1面
	251	糸半高木健治	古銭額	1個
	256	矢島達介	楮幣之額	1面
	309	坪谷善四郎	潮干狩の額	1面
	426	仲之町大忠	吉原小唄惣まくり額	1面
	433	佃や古田庄助	額堂 絵馬付	1個

	501	水谷幻花	屋形船之額	1面
	680	榎本生幸	屋形舟の額	1面
	718	秋山	額板	1枚
絵画(錦絵)	125	阿部伯爵家	北斎筆 富嶽三十六景画帳二十二枚張込	1冊
	126	阿部伯爵家	歌麿筆 浮世錦絵帳	1冊
	164	宮澤朱明	錦画	37枚
	223	小菅孝次郎	広重筆五十三次帖	2冊
	248	糸半高木健治	六十余州名所錦絵	1冊
	249	糸半高木健治	俳優錦絵	1冊
	262	矢島達介	武者錦絵	1巻
	263	矢島達介	俳優錦絵	82枚
	413	窪田勘六	初代豊国筆美人行列の図 五枚続	1組
	414	窪田勘六	広重豊国合筆五十三次	1帖
	415	窪田勘六	広重東海道五十三次 中版	1帖
	485	藤松田中	吾妻錦絵	1冊
	506	多田正雄	芝居錦絵	5枚
	515	田畑千壺	江戸百人美女錦絵	1冊
	516	田畑千壺	江戸百景(広重筆)	118枚
	647	松木平吉	江戸雨國夕涼之綿絵 豊国筆	5枚
	648	松木平吉	新吉原花魁道中錦絵 同(豊国筆)	同
	649	松木平吉	江戸風俗十二月錦絵 春潮筆	6枚
	650	松木平吉	日本橋子供行列錦絵 國貞筆	3枚
	651	松木平吉	江戸角力風俗錦絵	1巻
	652	松木平吉	同祭礼粧の錦絵 國芳筆	3枚
	653	松木平吉	江戸角力士俵入の錦絵 春章筆	2枚
	654	松木平吉	寛政両横綱錦絵(谷風・小野川) 春英筆	2枚
	662	村田幸言	錦絵十二月 三枚続	18組
	673	佐藤翠湖	江戸絵綴帳	2巻
	695	田中勤之助	錦絵其他	1冊
	697	田中勤之助	錦絵其他	67枚
	741	酒井好古堂	豊国江戸名所	1冊
	743	酒井好古堂	一九画江戸名所	2冊
	744	酒井好古堂	歌麿江戸十景	1冊
	745	酒井好古堂	廣重江戸三十六景	3枚
	746	酒井好古堂	江戸じまん 廣重画	1枚
	738	酒井好古堂	廣重江戸名所帳	1帖
	799	廣瀬辰五郎	山王祭之図 歌川國次筆	1枚
	800	廣瀬辰五郎	江戸二十四時國貞之画	12枚
	915	佐野するがや	江戸絵掛物	1幅
絵画(錦絵の版木)	827	野中都峯	歌麿筆美人絵木版	1枚
絵画関係	623	鈴木春浦	行燈 抱一所用	1個
書	239	江澤菜魚	其角の書軸	1幅
	314	川尻清潭	谷文晁の書翰	1通
	315	川尻清潭	瀧澤馬琴書翰	1通
	316	川尻清潭	大田蜀山人の書翰	1通
	317	川尻清潭	加藤千蔭の書翰	1通
	320	川尻清潭	梅幸の書翰	1通
	423	仲之町青柳	通箱 抱一書	1個
	425	仲之町大忠	亀交山手翰	1幅
	428	稻本楼(吉原)	一蒲書画	1幅
	430	新尾張屋	玉屋山三郎抱遊女濃紫の書幅	1幅
	442	大田南岳	蜀山辞世の狂歌	1幅
	456	加賀豊三郎	馬琴筆 短冊かけもの	1幅
	462	加賀豊三郎	下里巴人集 よせ書	1冊

	486	桃水	雪中菴 蓼太筆 自画賛	1 幅
	487	桃水	栲良筆 自画賛	3 幅
	488	桃水	藍谷箕山筆 詩の幅	1 幅
	489	桃水	服部南郭筆 書幅	1 幅
	520	田畑千壺	其角の短冊	1 枚
	547	栗原かなめや	大石良雄筆掛物	1 幅
	607	中村喜一郎	市川団十郎書簡額	1 面
	611	久保田米三	天明頃文人宿所摺扇面	1 本
	631	宝井善次郎	巻物 桃青筆 (*芭蕉)	1 巻
	632	宝井善次郎	掛物 嵐雪筆	1 幅
	634	宝井善次郎	掛物 其角筆	14 幅
	640	磐瀬	消息 千蔭筆	1 幅
	642	磐瀬	山下八景詩巻 蜀山人筆	1 巻
	702	田村成義	北村季吟筆俳諧式目 横物	1 個
	708	伊藤やま子	江戸時代の湯呑み 文晁抱一蜀山の書画あり	1 個
	751	角田真平	其角筆 大短冊	1 枚
	768	佐藤雨馨	小屏風蜀山筆	1 双
	848	笹川臨風	狂歌詩短冊賛	1 冊
	900	堀	五明桜花扇筆歌紙入	1 個
	901	堀	六樹園筆 扇子	1 本
	902	堀	七代目花扇筆 扇面	1 枚
	969	樋口傳	吉保公筆 短冊	1 枚
	971	樋口傳	吉里筆 掛物	1 幅
書画関係	158	片山正幡	三政太夫	1 幅
	268	清元市寿	金短冊	1 枚
	421	仲之町青柳	玉屋山三郎 掛物	1 幅
	535	竹内久一	十六画(ママ) 漢巻物	1 巻
	537	竹内久一	掛物	1 幅
	633	宝井善次郎	巻物 箱入	1 箱
	898	篠田胡蝶	不味公茶掛	1 幅
	459	加賀豊三郎	蜀山人 印譜かけもの	1 幅
絵図	144	西澤笛畝	江戸図鑑綱目 元禄二年板	
	227	吉田永光	屋敷之図	1 枚
	445	鹿鹽秋菊	元禄同堂(深川三十三間堂) 敷地図面	1 枚
	483	藤松田中	江戸之地図	17 冊
	504	多田正雄	日本地図	1 冊
	505	多田正雄	世界地図	1 枚
	524	竹内久一	絵図	1 枚
	534	竹内久一	大奥向惣絵図	1 冊
	548	栗原かなめや	海陸御固の絵図面	1 幅
	677	松澤八右衛門	江戸地図	30 枚
	713	渡邊大助	古地図三十枚	1 箱
	742	酒井好古堂	分間江戸大絵図	2 冊
	772	南葵文庫	武州豊島郡江戸庄図	1 枚
	773	南葵文庫	江戸大絵図元禄十五年版	1 枚
	774	南葵文庫	慶應三年改正江戸大絵図	1 枚
	845	笹川臨風	元禄六年 吉原絵図	1 枚
	850	齋藤隆三	奈良茂霊岸島居宅絵図	1 枚
	851	齋藤隆三	同(奈良茂) 橋場別墅絵図	1 枚
	906	上村蛙水	寛永江戸大絵図	1 枚
	907	上村蛙水	武州細見図	1 枚
	908	上村蛙水	江戸増上寺之図	1 枚
	960	後藤家監督	吹上茜染場図面	2 枚
古文書	177	澤京治郎	御本丸宿直手控	1 枚

	240	江澤菜魚	密柑下売証文	1冊
	242	江澤菜魚	御前借金割合控	1冊
	276	大谷儀兵衛	御触帳	1冊
	288	小泉迂外	伝授本 宝暦時代江戸大夫自筆	1冊
	318	川尻清潭	蔵前札差御條日帳	2冊
	329	川尻清潭	七代目団十郎年譜	1冊
	331	川尻清潭	板倉兵吉願書	1通
	332	川尻清潭	近江屋佐兵衛 株式譲渡諸勘定帳	1冊
	333	川尻清潭	文書各通	16通
	338	金山辰三	安政之地震火事関係書類及文書	6通
	394	榎本育三	御墨付	1点
	436	大田南岳	大田家由緒書 蜀山自筆	1冊
	441	大田南岳	日記類 手紙集	3冊
	444	鹿鹽秋菊	寛永より正徳迄深川三十三間堂舊記	1冊
	446	鹿鹽秋菊	文化同堂(深川三十三間堂) 再建諸大名勸金帳	1冊
	447	鹿鹽秋菊	天保同堂(深川三十三間堂) 弓矢起證文	1巻
	449	鹿鹽秋菊	同堂(深川三十三間堂) 通し矢矢敷帳	1冊
	531	竹内久一	小間物屋十組連印帳	1冊
	536	竹内久一	唐木やの証書	1枚
	618	市川宗家	大口屋暁雨手紙	1冊
	760	中山半兵衛	道中日記	1冊
	830	野中都峯	御本丸炎上に付献金上納指令書	1枚
	852	齋藤隆三	同(奈良茂)品々道具之扣帳	1札
	853	齋藤隆三	奈良茂系図	1冊
	930	手島醇	大久保彦左衛門宛書状	1通
	956	頼重松	馬琴来翰集	1冊
	957	頼重松	古文書	5枚
	958	後藤家監督	舊幕府呉服師後藤縫殿之助遺品 後藤家系図	1巻
	959	後藤家監督	宮染秘書	6冊
	961	後藤家監督	所司代板倉周防守重宗御状	1通
	962	後藤家監督	御大老安藤対馬守重信御状	1通
	963	後藤家監督	御老中永井信濃守尚政御状	1通
	970	樋口傳	吉保日記 写本	1冊
古文書関係	275	大谷儀兵衛	制札	4枚
	319	川尻清潭	同(蔵前札差) 切米扶持判物筆筒	1個
	448	鹿鹽秋菊	元治同堂(深川三十三間堂) 用書物箱蓋	1枚
鑑札	172	澤京治郎	鳥曾所鑑札	1枚
	173	澤京治郎	同(鳥曾所) 紙切手	2枚
	174	澤京治郎	御本丸西丸御用荷車札	1枚
	175	澤京治郎	紀州家水戸家薩州家門鑑	3枚
	322	川尻清潭	同鑑札 木札	3枚
	398	野々山橘雄	関所通行手形	1枚
	498	水谷幻花	江戸時代門鑑	13枚
	757	熊井福	箱根関所の手形	1面
書籍	291	小泉迂外	幸築集	1冊
	295	小泉迂外	東西古今集写本	1冊
	296	小泉迂外	はつぶみ	1冊
	518	田畑千壺	梅ごよみ	60冊
	525	竹内久一	画合せ	1冊
	529	竹内久一	恩竺仙撰	2冊
	855	巖谷小波	馬づくし 狂歌 焉馬襲名	1冊
	918	佐野するがや	萬職手提灯	2冊
書籍関係	530	竹内久一	細工物下絵稿本	5冊
書籍(版本)	145	西澤笛畝	江戸名物詩 天保板	

	146	西澤笛畝	小説土平伝 明和板	
	153	片山正幡	殿居囊	1冊
	154	片山正幡	殿居囊後編	1冊
	155	片山正幡	青標紙後編	1冊
	156	片山正幡	青標紙	1冊
	157	片山正幡	懷賓千代友	1冊
	159	片山正幡	泰平年表	1冊
	162	宮澤朱明	端月集	1冊
	163	宮澤朱明	桃太郎画本	1冊
	171	澤京治郎	江戸名家買物案内上下附録共	3枚
	178	澤京治郎	富黄表紙及富買様秘伝	3冊
	179	澤京治郎	寛政版御江戸名所方角	1枚
	180	澤京治郎	同(寛政版) 町法被仰渡書	1枚
	181	澤京治郎	御府内諸商人十組名鑑 全	2枚
	182	澤京治郎	東部商人鑑	1枚
	207	淡島寒月	文政年代女寺子屋手本	2冊
	220	小菅孝次郎	宝永版古今吉原寄語	1枚
	254	田中半七郎	大日本二千年袖鑑	1冊
	255	田中半七郎	江戸町々いろは分独案内	1冊
	261	矢島達介	狂歌歌袋(蜀山人京伝)	1冊
	289	小泉迂外	仁本写 享保四年版待売堂旧蔵	2冊
	290	小泉迂外	十川集 文政八年版	1冊
	298	小泉迂外	十六画漢縮像 悪摺?の版本	1冊
	339	金山辰三	安政年間頃痢流行記	1冊
	347	服部長兵衛	絵本	1冊
	440	大田南岳	清風吟社集(詩稿)	5冊
	443	大田南岳	百人一首 勝川春章筆版本	1冊
	464	加賀豊三郎	黄表紙名作二十三部	23冊
	484	藤松田中	江戸五十三次案内	1冊
	519	田畑千壺	絵本江戸みやげ	10冊
	523	竹内久一	江戸年中行事	1冊
	528	竹内久一	狂歌本	2冊
	532	竹内久一	馬具やの本	1冊
	674	佐藤翠湖	武家必携殿居囊	1冊
	675	佐藤翠湖	江戸砂子	3冊
	694	田中勤之助	江戸名所	9冊
	735	酒井好古堂	江戸名所ばなし	2冊
	736	酒井好古堂	東都勝景一覧	2冊
	737	酒井好古堂	花容女職人鑑	2冊
	739	酒井好古堂	花街漫録	2冊
	776	尾形月耕	花街漫録	2冊
	775	尾形月耕	江戸砂子	8冊
	842	野中都峯	さんちや大評判吉原出世鑑	1冊
	846	笹川臨風	種彦書入本 吉原伊勢物語	1冊
	925	児童用品研究会	江戸年中行事	1冊
書籍(版本)(音楽)	292	小泉迂外	十寸見要集外巻 写本	1冊
	293	小泉迂外	十寸見要集外巻	1冊
	294	小泉迂外	十寸見要集別巻	1冊
	287	小泉迂外	河東節唄本	9冊
	377	若井しま	十寸見要集	3冊
	378	若井しま	河東節の歌本	1冊
	710	伊藤やま子	河東節歌本 山彦秀次舊蔵	1冊
書籍(版本)か	967	井上剣花坊	川柳	18冊
書籍(版本)関係	463	加賀豊三郎	娼家用文章 三馬草稿	1冊

	610	久保田米三	馬琴自筆八犬傳校合本	2冊
	703	田村成義	「肇のまま」志賀理齋自筆随筆	10冊
刷物	832	野中都峯	新吉原新宅地割細見図袋紙添安政四年	1枚
	836	野中都峯	新吉原二の替りとうらう番附	2枚
	837	野中都峯	吉原細見 里八景	1点
	838	野中都峯	同(吉原細見) 甲子細見	1点
	839	野中都峯	同(吉原細見) 香名伝本	1点
	840	野中都峯	吉原細見曙が原	1点
	841	野中都峯	同(吉原細見) 和歌三鳥	1点
	161	宮澤朱明	山王祭礼番付	1冊
	165	澤京治郎	江戸時代各社寺富札	39枚
	167	澤京治郎	同(江戸時代各社寺) 富絵曆	1枚
	169	澤京治郎	明治初年外人富札	3枚
	208	淡島寒月	辻うら札	1枚
	219	小菅孝次郎	文化吉原女夫印刷物	1枚
	241	江澤菜魚	千社札本	1冊
	258	矢島達介	大当り楽屋寿語録(*録)	1枚
	259	矢島達介	新板大幕賛歌端歌都々逸寿語六	1枚
	260	矢島達介	寿出世寿語六	1枚
	277	大西いせ万	納札題名集軸新古	3本
	278	大西いせ万	納札題名集	3冊
	280	大西いせ万	納札集 同	1枚
	281	大西いせ万	纏付古本	1冊
	282	高橋藤	納札集	4冊
	283	高橋藤	納札張ませ	1幅
	408	若松	江戸時代相撲番組	9枚
	409	若松	相撲絵番付	1軸
	410	若松	吹上御殿相撲之図	1軸
	527	竹内久一	番附	6枚
	533	竹内久一	寿語録	1枚
	636	宝井善次郎	宝舟チャンチャン	1枚
	678	松澤八右衛門	江戸双六	3枚
	750	酒井好古堂	東都會席づくし	1枚
	783	尾形月耕	文化十五年曆	1冊
	784	尾形月耕	文政二年曆	2冊
	798	廣瀬辰五郎	商標張込	1冊
801	廣瀬辰五郎	玩具絵の張込	1冊	
831	野中都峯	駒込染井巢鴨菊の見物獨案内図	1枚	
833	野中都峯	新吉原はやり小歌総まくり	1枚	
834	野中都峯	今昔吉原文鑑	1枚	
835	野中都峯	色里名品鑑	1枚	
890	橋田素山	千社参詣出世双六	1枚	
891	橋田素山	納札題名集	3冊	
892	橋田素山	朔日丸廣告	1枚	
893	橋田素山	千代田の千社札風の廣告	1枚	
897	山中笑	絵双六類	36枚	
917	佐野するがや	江戸年中行事	5点	
刷物か	228	吉田永光	五色の早見	1枚
	307	齋藤善夫	着物 模様紙	6枚
刷物関係	166	澤京治郎	同(江戸時代各社寺) 富規則	2枚
	168	澤京治郎	同(江戸時代各社寺) 富札印	2枚
	894	橋田素山	納札順札木札(元禄寛文)	2枚
祭礼	335	金山辰三	鍾馗之山車	1組
	336	金山辰三	御柳酒所 模型	1組

	337	金山辰三	御神楽殿 同(模型)	1組
	431	佃や古田庄助	山車 山王祭小車模型人形小道具付	1台
	435	佃や古田庄助	神輿	1個
	492	清水仁兵衛	神田明神の山車	1組
	496	細田安平	日本橋祭禮外籠枠	1点
	497	清水治右衛門	翁山車	1組
	728	馬喰町誠誼會	馬喰町天王幟 ※写真 13	1対
	729	馬喰町誠誼會	同(馬喰町天王幟) 幟杭木彫馬	1対
	786	尾形月耕	獅子頭	1個
	843	日本橋魚河岸事務所	魚河岸山車 三代目原丹月作	1式
	844	魚がし駒作	御祭山車 原丹月作	1式
	922	児童用品研究会	灌佛会花御堂	1組
	924	児童用品研究会	木彫天神及天神軸	3点
	972	佐久間町総代金井徳右衛門	神田佐久間町 素菱鳴尊之山車 ※写真 20	1組
	351	市場徳兵衛	山王祭番附	2枚
	368	永峰	山王祭の番附	1個
その他	209	淡島寒月	京紅札	1枚
	215	小菅孝次郎	両国橋柱笠台	1個
	312	坪谷善四郎	楊弓	1点
	340	服部長兵衛	神鏡 木型	2点
	385	千代川	皮	1枚
	432	佃や古田庄助	水屋	1個
	434	佃や古田庄助	山門	1個
	660	川上邦基	浅草観音前白酒屋前万年屋樽鏡板	1個
	715	渡邊大助	水桶	1個
	805	上田浅吉	木彫の古銭	1箱
	810	勝見與吉	紅葉山棟上小槌	1個
	919	佐野するがや	門扉葵紋	1個
	920	佐野するがや	葵紋古瓦	1個

註) 『三越』第5巻7号<1915年>より作成。種別は筆者が便宜的に設定したものであり、元のリストは所蔵者順である。番号は、元のリストの掲載の順番を示す

Commercialization of the Edo Style in the Meiji and Taishō Periods: The Booms of Genroku Patterns and Edo Taste Created by Mitsukoshi Department Store

IWABUCHI Reiji

Many of the “traditions” that have been “referred to” or “recognized” to form a national identity of members of different social groups since the establishment of Japan as a nation state up until now are based on the fundamental culture shaped in the primitive/ancient times and the culture developed in the City of Edo. An “Edo style” was first “recognized” during the period from the Meiji 20s (1887-1896) to the Great Kantō Earthquake of 1923. It was developed politically and commercially in different time spans. The political development of the style manifested itself in forms of resistance against Europeanization policies and desire for preservation of national characteristics in the Meiji 20s. These phenomena have been analyzed in the studies of Japanese-type nation-state building, which indicate that Edo culture created “Japanese traditions” and thus integrated the country as a nation state. On the other hand, the commercialization has not been fully analyzed. Therefore, this article examines the commercialization of the Edo style promoted by Mitsukoshi from the end of the Meiji period to the Taishō period (at the beginning of the 20th century). More specifically, this paper focuses on the great boom of Genroku patterns after the Russo-Japanese War of 1904-1905 and the Edo taste widely adopted in daily life and culture during the Taishō period (1912-1926) to analyze the mechanism and impact of the commercialization of the Edo style. The results of the analysis indicate the following two points.

- i. The boom of Genroku patterns was created by Mitsukoshi with support from Genroku-kai, a society spun off from a literary circle to organize tea parties and exhibitions of Genroku culture. The society’s discussions focused on matters relating to the Genroku years from 1688 to 1704, including various phenomena and criticisms of the era and the appropriateness of reinterpretation of Genroku patterns. Genroku-kai was founded, not by Mitsukoshi, but by Zanka Togawa, a former retainer of the Tokugawa Shogunate, by using his private network. Eventually, Zanka and Mitsukoshi were estranged, in part because he was appointed to Senior Advisor of Shirokiya and in part because the Ryūkō-kai, an advisory group of Mitsukoshi, functioned to fulfill its intended purpose. Genroku-kai ended up in merging with Bungei Kyōkai to become Rengō Kenkyū-kai, and the Genroku boom lost its momentum.
- ii. The “Edo style” of the Taishō period was commercialized by Edo Shumi Kenkyū-kai established by Ryūkō-kai as its subcommittee to study Edo taste. They focused their theme on the Tenmei

years from 1781 to 1789, compiling various data to create a “Tenmei style.” Their study results, however, were given little attention. When an exhibition of Edo taste was held, various Edo styles, including the Genroku style, were combined, irrespective of class or time period. This helped an image of “Edo taste” establish itself among people who had never experienced the Edo period. Thus, a vague but new image of Edo taste was shaped in the process of commercialization before the Great Kantō Earthquake. It was also different from the one depicted by Kafū Nagai as escapism. Later, the research of Edo Shumi Kenkyū-kai was taken over by the studies of Edo culture by Engyo Mitamura and other Japanese literature scholars.

Key words: Edo, representation, commercialization, department store, Edo taste, recognition of traditions